
“ダブル・イノセンス” (白の功罪) The ORPAHN II

レイ@名無し

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

“ダブル・イノセンス” (白の功罪) The ORPAHN
N I I

【Nコード】

N5103D

【作者名】

レイ@名無し

【あらすじ】

II・地球篇（諸事情により不定期更新） シリーズ完全独立物
語 シャトレイサ・シアノグラ、19歳。少女でも無く、大人でもない。イデオロギーもプロパガンダも知らない。「彼は優しくない」。そういう感じ方は「唯の我儘」なのか「歪みを指摘したサイン」なのか。その出逢いは「危険」なのか「怠慢」なのか。一部の国や企業が経済の力任せに、破綻した国々を買い取った国境無き混沌の近未来地球で、理不尽な戦いは、最新兵器を駆る彼女を否応

無く自律に追い立てる けして彼女を不幸だと思っ
てはならない。けして彼女に同情し、共感してはならない。そして、これは悲劇ではない。何故なら、それはあくまで「他人の人生」だからだ

1 わたしの想い (前書き)

一部の国や企業が経済の力任せに、
破綻した国々を買い取った国境無き混沌とした近未来地球。
黒海に造られた都市ウオクトワイスでは、
敵対する民族主義運動ハーレイ・クラファの妨害に悩みながら、
アフリカを始めとする乾燥地帯にG・B・N・(グレートブルー
ネット)と言う
緑地化計画を進めていた。

安穩とした生活を飛び出し、衝動的に戦いへ身を投じたシャトレ
イサは、
やがて生々しい人間同士の感情に揉まれて、戦いの理由を見いだ
す。

その行き先を人は幸せと言うのか、不幸だと言うのか。
茫洋の感覚の海にあるシャトレイサ(主人公)と、
圧倒的な父権への葛藤にあつて戦えずにいるクライン。
周囲は、彼らは出逢つてはいけなかったのだと言う。
しかし、それならば何故、人々はその危険性を排し、
彼らを助けようとしなかったのか

この物語は、「優しさ」がテーマです。

“ダブル・イノセンス”（白の功罪） The ORPAHN II

1 わたしの想い

『貴女は人殺しになったの?』

必要なら、そうもなりますし、
人がそう思うのなら仕方ありません

『…仕方が無い……。貴女が人の命を手にかけるたび、
貴女の心も少しずつ死んでいくのよ。
でもそれは私のせいかもしれない』

時代を言い訳にしないのですか

『母親とは、そういうもの。何かにつけて理由は、自分のせいか
子供のせい』

歪みを楽しむと言っているのですか

『痛みがあるなら、これが人なのよ』

The ORPHAN 2

- Double INNOCENCE - (白の功罪)

私は、朝が嫌いだった。

午前十時の若くて青い光は好きだったし、

禍々しいほどの朝焼けも美しいと思つてた。

でも、空が白けてから日差しが自己主張を確定するまでの時間帯、この世のあらゆるものが動き始める、静寂が破られる瞬間の騒々しさが私には辛かった。

夜、一度太陽は死んで、昇ってくるのは再生の証だと言う。何故、私は命が甦るその喜びを味わえないのだろう。

夜のような孤独な時間が続くなら、いつまでも闇が留まればいいのに、朝は確実に必ずやってくる。

どうせ

どうせ朝が来ない世界を望むなら、この煩わしい地球を脱出して、途切れない低音の響きの中、さんざめく星達の囁きを肌で聴きながら漂流したい。

私が願うのは、それだけだったと思つ。

私は……

そう、この星が ……

2 Prologue 自分と言ひつと

“生まれてきてごめんなさい”とか、“生きる資格は無い”などと言つ考えとは無縁のはずだった。

と言つよりも、もしかしたらそう思つ年齢を過ぎてしまつていたのかもしれない。

もはや子供でもなく、しかし大人でもない、彼女にとって微妙なそのバランスを保つという課題は、煩わしくも必然的に訪れていた。その息苦しさから享樂へ走る衝動も、情熱に生きる体力すら持たない、その否応の無い精神移行の道中にはただ、家族は離散したのだと言つ事実が横たわつていた。

長く生きた人々のまやかしが造りだす、理不尽な世界を感じるにつれて、結果の見える期待感を抱くのも諦めの原因であるのだから。

追いつがる罪悪感を振り切つて、嫌悪に苛まされるのであった。時折、これほど人間が煩わしいと思うのは、自分だけだろうかと思意の海に浮かんでみる、悪い癖が出来てしまつている。

そんなまどろみの底から、ふいに現実に引き戻された。

「ねえ、シャトレイサ」

見慣れた少年の顔が目前にある。

「……………あ……………」彼の名を口にしようとして、声が喉の奥に引っかかった。

「ここにしか来るとこ、ホント無いんだなあ」

嫌味は含んではいない。

「他に行くところもないし…練習生は外出も管理厳しいし……………」

ぼそぼそと言ひ訳のように断つた。

「そんなに宇宙へ行きたいならさ、ルナ・ベースに入れば良かったのに」

「無理だよ。家飛び出しちゃつて、アタシ的にここしかないし……………」

ミレイヤはどうしたの」

「それこそ個人的な話だよ、シャトレイサ。僕だって一人で出歩くさ」

シャトレイサは壁に寄りかかって小声で囁いた。

「ヴオロス・チームは戦争に出るんだよ」

まるで自分に言い聞かせているようだ。

「楽観はしてないって」

「負けずソトーも返す。」

いつ死んでもいいのかもしれない。決して死というものを恐れていないわけでもないが、これも人間の特権なのではないかと思う。

でも 彼女は願う。

価値ある死を望むのは悪くないことだ。大儀も正義もいらな
いけれど。

「第五世代がどこに配置されるか知ってる？」
フィクス

話題を変えた。

「アフリカの北部ってくらいしか」

「G・B・N・(グレート・ブルー・ネット)を無駄に死守せよ
てことね」

「戦争の新人投入していいのかなあ。曲がりなりにも最前線じゃな
い？」

「さあ…どうせテスト部隊だとして考えてないのかも」

「お金、かかっててもそうなんだ」

生死がいかなるものかが、認識できない子供の会話のようである。

二人はそこを引き上げて、自らの学び舎に戻ることにした。

長い渡り廊下を抜ける途中で、広大な芝生の上に足を乗せる。

いつもよりは澄んだ青空だった。

「ソトーは、ご両親に言った？」

「まさか。ここに入るのだって猛反対だったのに、戦場に行くって
言ったら殺してでも止めさせられるよ」

「苦勞は聞いたよ。でもクラファからウオクトワイスの保護を受けに、その…寝返つたなんて、その程度のこと言われた位で、ソトーが反発すること無い……」

「…反発とかそんなんじゃないよ。親がそんな陰口たたかかれてるの見たら、子供がこんな風になるってこと、どうして」

「ソトーが栄誉ある戦績を残したりしたら、彼らはソトーの両親に言うんだよ。“立派な味方を育てた偉大な親だ”とか“これでウオクトワイスに恩を返したと思うな”とか、賛否両論の大きなお世話言いまくり。結局ソトーと言う独立した個人で評価はしてくれないしかもそれぞれ人は嗜好があるから自分の目に付いた好き嫌いでしか判断しない」

「……でも僕は、親がそうだったからではなくて、親がそんな苦い立場にあつて、子供が同じ苦味を味わつても、親が子供の前途を心配するほど悪い作用はしてないって、判つてほしいんだ」

「いい子だよソトー。私にそんな親の立場も考えた行動ができたら、ここには居なかつたと思う……」

「戻る気もないくせに」

「…代弁、ありがとう。でも戻る道も分からないのが、正直な話」
ソトーには、喋りやすい。

感情はストレートに顔に出るくせに、言葉として発するには勇気のいるシャトレイサである。

声を出して泣いたりとか、怒りにまかせて叫んだりとか、勢いで聞いただったりとかは、苦手だった。

親からはそうした吠え方を習つてはいないし、もの静かなインテリジェンス的育ちをしたためだろう。

こみ上げた感情は、涙も流さないように飲み込む癖がある。

しかし人間のいる環境は自閉的な殻を許さない。

絶え間ない人間関係で、過剰に反応したシャトレイサの防衛本能は、硬直したような合理的判断と、オブラートを剥いだ言葉で武装することに従事してしまつた。

見た目で判断しがちな世間一般の視線は、「大人しい子」「普通すぎて目立たない子」との評価を下し、秘めた感情を無反応と判断する。隠すことは許されないのだ。

そして彼ら自身の判断が欺かれると、驚愕と警戒、好奇のエネルギーを注ぎ込んで、異端を排除しようとする。

特に、自分たちより優れていた場合の嫉妬と、理解ができない場合に。

そんな普遍的な模式図が、シャトレイサには我慢がならない。

(自分たちの知っていることが、全てだと思っている狭量に気が付かないなんて…)

さしずめ狭義的に『無知の知』といったところであろう。

3 優しさを量る

シャトレイサも自身の社会的性格が、視野を狭めているのは知っている。

だが、ヒトには個人における限界もあり、模式図も伸縮するといふものだ。

そんな馬鹿馬鹿しさに反発する復讐心理をも醸す言動は、衝動的に不意をつく言動を誘発して、周囲の反応を楽しむ快感の味を知り得た。

それで少しは自身の鬱屈したストレスを解放できてるならばいいが……。

(自分に対する言い訳……)

自覚だつてできている。もし、そんな感じの話をする事ができたら、ソトーは理解してくれるだろうか。

もっと違う、正確で核心的な言葉をもらえるだろうか。

隣を歩く、少年が嫌いではない。

少し鬱陶しいときもあるが、彼はシャトレイサとの距離を無理に詰めるタイプではなかったのが、彼女にとって幸いしていた。

(君は、優しいの？)

そつと心に思った。

(でも話すには…勇気がある…)

愛情の告白にも似た緊張感を伴う。

それにも増して、他人を受け入れることが何よりも恐ろしい。

(人は、コワイ)

サクサクとよく刈り込まれた芝生の上を踏む。

二人の行く先から別の声がした。

「ソトー！シャトレイサ！」

どちらかと言うと、ソトーを迎えに来たミレイヤだった。

伸びやかな肢体を走らせて、彼女が寄ってくる。

「今日、“面談”よ。忘れたの？」

「でもまだ時間があるじゃないか」

「やだあ。集合時間が変わったの、忘れてるんでしょ」

「いつ言ってたんだよ？」

「昨日のセミナーでよ？いいわ。迎えに来たから」

満面に笑みを浮かべて、ソトーと話していることの喜びを隠そうとしない。

そんな少女のあけすけな言動は、シャトレイサには厭らしく感じる。

女性的な魅力を更に強調したような大げさな仕草と、女であることを否定しない物言いは、いつも嫌悪感をもたらすのだ。

だからと言ってミレイヤに罪はない。自身も彼女が嫌いではない。

(ただ、これからのことも考えて…この場には不謹慎……)

どちらかというと、言い訳である。

感情は、嫉妬と羨望。

女としての女性性か。

白い建物内に入る前、三人は大声で呼ばれた。

「遅刻ですよ！」

一喝されて急に思い出す。

「…任務だった…」

ここは、“学校”ではない。

4 第五世代(ファイブス)たち

「コーミル大尉、こちらが第五世代『ヴォロス』の戦略プログラムチーフ、ライナル博士です」

よろしく、と無精ひげですら気取ったようなキャラクターで、細面のライナル博士は手を差し伸べた。

「一応、適性検査は受けての選抜チームだが、どうなのかね」

「生徒”達との相性もありますし、マシンの開発も完璧とは言えませんが、言ってしまうとどのアイテムとっても実戦投入無しには何とも」

軽く言っただけの博士の態度が、無骨タイプのコーミルには受けなかつたらしい。

振り向いてすぐ後ろにいた男に愚痴る。

「我々は戦闘のアイテムだそうだ。名称を変えるかねクライン大尉？」

コーミルとは正反対に見える、控えめに佇んでいたクラインと呼ばれた男は、苦笑した。

「仕組みを考察しますと、指揮権は半減しそうですね。ですがコーミル大尉も実戦で鍛えられた方でもありますし、経験重視の点を踏まえると正論です」

「………と云うわけだ。私に友軍はいないらしい。おとなしく博士の講義を受けるとしよう」

カツカツと足音よろしく、コーミルは大股にライナルの前を掠めた。

「まだ貴方たちもテスト段階なのですけどねえ。どうぞ研究室へ」
はて、と頭を掻いてクライン以下残された数名を案内した。

向かう研究室の途中で、研究員とは異なる面持ちの、そしてこの場に似つかわしくない若者とすれ違つた。

「彼らが生徒たちですよ」とライナルはいかにも学校の教師のよう

だった。

テストパイロット

「今回の卒業生は十一人、チーム編成は三人から四人で一チームを予定しています。それについてのコマンドーは適性検査の後、然るべきチームと組むことになってますが……生で研修されるからには、コマンドーの精度を是非とも上げなくてはなりませんね。で、

ウオクトワイスは本気で彼らを第一線投入を？クライン大尉」

「ウオクトワイスはそのように指示してます」

「しかし性急すぎやしませんか。あそこは中立地帯の協定を結んでいてもその実、水面下の激戦地なのは、いくらなんでもご存知のはず。ましてハーレイ・クラファ」

「政治屋がすることは私の範疇ではありません。命令があり、敵がいるので勝利を努力するしか、我々の生きる道は無いのだと心得ているつもりですが」

淡々とした答えは自らに言い聞かせているにも見えた。

一行は研究室の入り口へ立つ。

「………他の世代は、まあまあ順調ですしね。無駄死になさらないよう、サポートしましょう。クライン」

改めて挨拶するようにライナルは手を差と伸べ、クラインもその手を握り返した。

「クライン・カノーヤーです。足手まといにならないければ良いですが」

名乗った名前に、(おや)とライナルの顔によぎる。

「カノーヤー……？ご子息ですか？」

「似た名前はいくらでもありますよ」

クラインはダークブラウンの髪を掻き揚げて微笑した。入った研究室は広い間取りで、こぎれいに整理されていた。

数人の研究員らしきスタッフ、いくつかのモニターをはじめとするハード機器、不可解なヘッドセット云々……。

「お席にどうぞ。こちらのヘッドセットを装着していただき、生徒たちのパターンと組み合わせさせて最良の結果が出たら、チームコマン

ダーを決定する手順となってます。あくまでデータ上のお話ですの
で、私に決定権はありませんが」

「専門家の判断が決定権を持つのが当たり前だ。謙遜する必要は無
い。ライナル博士、生徒たちは何処なのかね」

コーミルの質問に、研究員が指示を出すと“壁”に見えていた部
分が一面透明なガラスに変わった。

その外には、見下ろすように作られた別室に“生徒たち”が集め
られている。

彼らは既に奇妙な装置を頭に着けていた。

「向こうからは見えていません。が、コマンダーが来ることは彼ら
にも言っています。確定的データが得られた場合は、機関を通し
て軍とすり合わせの上、生徒と指揮官を然るべき処に配属になるそ
うですが、現時点で生徒と指揮官の顔合わせはありません。また、
シミュレーションで相性が良かったとしても、そのまま現場に反映
されるかは不明です」

ライナルが指を鳴らす。

窓が閉鎖され室内が減光された。

「これから戦闘シミュレーションを彼らと行います。スタートして
から暫くの後、プログラム内では自動的にコマンダーとパイロッ
トの四人編成に分けられる仕組みになっています。具合が悪くなっ
た方は拳手を」

クラインは、コーミルの左手がモゾモゾと動くのを視界の隅に感
じた。

5 Mission 1 野望の故郷

ランドキャリアと言うのは正式名称ではない、とはフレッチャーのささやかな主張である。

こと巨大な推進装置を搭載し、バイク型戦闘機を積み込む母艦には不似合いだというのだ。

水面航行やある程度の飛行能力など、空間の移動にあらゆる機動性を活かして、世界の流通業界を飛躍的に成長させた貨物機を総称して言ったものが、軍用にも転化されたものである。

そして、アフリカの前線に投入されたランド・キャリア“イバロ”も、非生産的な現場へ投入された新造艦であった。

「……………またシャトレイサが？」

メナムは眉をしかめた。

「こまるなあ…掃除、大変なんですよ」

よほど彼女に直接聞かせたいところだが、レジーヌの表情で続けるのをやめた。

「これも技術担当の仕事だと思って。悪いな、あれでも大事な戦力だから」

軽く振った手を頭に、髪をほぐしながらレジーヌは立ち去った。

「オレは掃除屋に転職か…」

半ばぼやきながら、脚立の上から“ヴォロス”のコクピットを覗き込んだ。

コクピット内の計器は被害を免れたが、床と左側の壁沿いに吐瀉物が一面に散らばっている。

「出撃のたびにゲロ吐くヤツなんているかよ」

現場を見る限り、彼にとってはその戦力は疑わしい限りだった。

その犯人は医務室に直行し、スーツを着たまま診察を受けていた。

「もっとこう、ラフに受け入れてもらえませんか？」

ネルが首をかしげる。

「反発しちゃいけませんよ コントローラは貴方が戦闘に勝つためであり、貴方が生き残るための道具です。ラボではこんな反応無かつたんですけどね：予想外ですよ。第五世代目ファイブスで何故こんな現場で拒絶反応が起きて吐いてしまうのか、あなた自身を解析してもらうことになります」

疲労の濃い顔で、シャトレイサは深く嘆息した。

「気分が悪いんです。休憩を要求します。それに、うがいがない」

ネルの返事より早く、シャトレイサは額の上のコントローラを外すと、医務室の隅で顔ごと洗いだす。

「安定剤を出しておきますから、服用を忘れないでください」

「私のデータ、どうするんですか？」

「ウォクトワイズなどの各研究所に送りますよ。原因究明次第あなたに合うシステムを組み立てるもらうしかないでしょう やれやれ、ここまで判りにくいタイプもどうか。催眠術にかかりにくいのは、あなたのような人ですよ」

肩をそびやかすネルに、シャトレイサは無言でコントローラを投げた。

「多少の改良は試みますが脳への負担もありますので、あまり改造するわけにも行きませんしね」

カップを片手に、医務室を出る。

「初めて死体を見て吐かない人間がいるのか……？それと同じだろう……」

シャトレイサはまだその死体を見たことがない。シミュレーションでだって死体は出ないし、機械が壊れるだけだ。まだ数えるしか出たことのない実戦で、何をしたともいえないレベルである。

いい加減な気持ちでここに来てしまったのは否めないが、大儀も正義も理想も彼女には皆無で、良い事か悪い事かも判断する基準すらできていないのだ。

「大ッ嫌い……」

状況や、誰かに対して、というよりも取り合えず、こんな言葉で気分の表現を試してみた。

「シャトレイサはコントローラが嫌いなのか？」

小競り合いの戦闘が終了すると、真つ先に艦橋を飛び出したフレツチャーがリラクゼーションルームで新聞を読みながら、向かいに座ったルンス中尉に第一報を目ざとく尋ねた。

「コントローラが彼女を嫌いなのもかもしれません。でもまだコクピットで外したことはないから、期待する余地はあると思います」

「隊から外すわけには」

「ネルの権限のほうがあなたより強いですよ。かばう訳ではありませんが、彼女は初戦を突破しました」

フレツチャーは不機嫌に新聞をシュレッダーに投げた。
そこにレジューが入ってくる。

「部隊指揮官が最初から不在だというのも、どうかしているとおもいません？ルンス中尉だっていつまでも代理してるわけにもいきませんし」

「レジュー……彼の評価を下げるような言い方はよさないか」

彼女の齒に絹を着せない物言いは承知の上だが、さすがにフレツチャーは嗜めた。

「個人を攻撃してるのではありません。このような異常事態を問いただしているのです。艦長」

「尤もであるが……戦争こそが異常事態の現象ではないかね」

「拡大解釈がすぎます。それに対応できる計画性を遂行するのが必要でしょう」

埒の明かない押し問答だった。

やや論旨がずれたため、存在感が薄れてしまったルンスが割って入る。

「アタック・バイクの指揮には特別な知識が必要です。私はたまたま知っていただけです。…専門的にセミナーを受けた訳ではないので。指揮官の配備は急いで欲しいですね。改めて要請できませんか？」

会議なのか雑談会なのか、デッキから上がってきたジョールは通りすがりに耳にした。

話の流れから、また原因がシャトレイサと知って、ジョールは表情筋を歪めて冷笑する。

「……あんな非常識を実戦に使うからだよ……」

いかにも軽蔑している素振りだ。

第三世代パイロットのジョールには、癩かんに障る女なのだ。

シャトレイサは彼的に「ありがとう」の一言もいえず、屁理屈をこねているような人間だと見下されてしまっている。

「この実戦配備も、実はテストなのだとおっしゃれませんか？どちらにせよ、部隊の再編成はありそうですし」

レジーヌの声がひときわ高く、耳に届いた。

6 わたしの行き場

胃液は苦い。

喉の粘膜を焼いて、呼吸のたびにひりひりする。

取りあえず渡された安定剤（あまり意味がなさそうだが）を流し込んで、落ち着く場所を探し、狭い艦内を歩いた。

（知らない人ばかりで……みんな青筋立ててるから、嫌だな）
そう思ってしまうのは、生来の性格ゆえと甘えが出ているせいだ。

膨大な技術と知識を詰め込むのに精一杯なのか、パイロット養成の課程には、軍隊色が薄い。死ぬほど下品で粗野な言葉を浴びせられたわけでもなく、体力の限界を超えるような厳しい訓練もあまり無かった。

温室のような育て方をしている一方で、生体テストには何かを含んでいただろうが……。

現実感の無さは、シャトレイサに平和ボケしたセリフを言わせてしまっているものの、体は正直な反応を示す。

ストレスである。

それが異常な緊張感を生み出し、コントローラの信号と相まった結果が胃にストレスをもたらしている、とも言える。

「肩も凝ってるし……」

艦後部デッキの展望室に、落ち着いた。

アフリカの太陽は痛い。

強烈な紫外線で眼や肌を傷めないように、ガラスに薄いスクリーンを張っている。

ともすれば普段着よりも着心地のいいパイロット・スーツは着替えず、上半身だけ脱いでTシャツ姿のままベンチに腰掛けた。

「……宇宙は、平和なのかなあ……」

見上げた蒼い空に、上弦の月が白い姿を浮かばせている。

あの衛星では、急ピッチで人が住む都市を建造しているという。都市、といつても一般人が住むにはまだまだ遠い先の話だが、ルナ・ベースと言う名で地上とは遣り取りされている。

未知の世界で「平和」もどうかと思うが、憧れは妄想を抱かせるというものだ。

「この“静かな激戦地”で、よくもそんな事が言えるよな」

頭の上からシャトレイサの平和が破られた。

体を硬くして、最大の防衛体制をとる。

「なあ？まただつて？お前、そのうちに胃液でヴオロスを溶かしてしまふんじゃないのか？」

苦手なジョールだった。

「……………」

「まだ大した戦果も上げてないし、軍人って自覚ないんだな。甘えるなよ。お前のせいで死にたくはないし、誰もお前にだけ構ってやつてる暇なんてない」

性格の善し悪しは別として、彼は正しい。だからシャトレイサは反論の余地が無い。

「なに勉強してきたんだ。フィクス第五世代って使えない奴の代名詞になつてんじゃないか。レジーヌも艦長も我慢してるの判らないんじゃない、

お前、帰れよ」

家に。

無表情で、ジョールの毒針を含んだ説教に耐えていたが、さすがに乾いた口腔内から唾を飲み込んだ。

「家には……家には帰るわけにはいかない……………帰っても……帰れない……………」

抗つてはみたが、声にはできなかった。

「だんまりか？泣かないだけ増しだつて誰も言わないさ。軍人は上官に報告する義務がある。その報告もできないだろう」

シャトレイサいじめでストレスでも解消したのか、リットは人を傷つけるだけ傷つけて、展望室を去った。

途端にハア〜と長い息を吐き、硬直を解く。

味方はいないのだ。

初めて社会に出た若者は、こんな体験を通して人生を選択しているのだろうか。

(自信が無いのは、誰でも同じ……人間は、一人……期待は、裏切りによる絶望……甘えは、自分の)

刺さったジョールの棘を抜きながら、自分に言い聞かせる。

「誰も教えてくれないじゃない……方法を聞きたくても、聞き方も判らないのに……！」

他人との意思疎通に必要な、人に通じる言葉の学習が優先されるべきだった。

(コワイ !)

急に恐怖感がこみ上げてきて、体中が強張ってきた。

(どうしたら、思ってることを口にできるんだろう)

「身体能力は申し分ないし、こう……運動神経がしなやかで反応が早いです。ですから早期投入してみたのですが……うーん……テスト・パイロットですから、いまなら部隊から外すことはできません。除隊ではありませんけどね」

ネルが決定的に言ってしまった。

「ウオクトワイスの研究所に一時、入所させた方が良いでしょう………予定のうちです。戦力の減退にはなりませんね？」

7 新生地球、理想と現状

「アフリカ宣言が事実上、形骸化しているのは否めまい？」

キースは、爽やかな空気を鋭く突き抜ける太陽の下、涼しい顔で言った。

「結局、民族と経済の壁を取り除くのは、困難だということさ」

「いや、経済的には良好と見えるが…」

「不動産って、厄介なの知ってるか？」

彼らはジープタイプの車で、暇つぶしに広大な航空基地の滑走路を走っていた。

もつすぐ輸送機が着陸するため、滑走路のゴミを確認して歩く。

「民族つてのは、大体が大地に根付いているもんだ。それが土地の領有権を主張始めたときに、戦争が起こる。付随する富を食うためにな。…まったく、マンション（土地なし）暮らしの俺には関係のない話さ。ええと、土地は誰のものでもない、与えられるものでもないといってたのは…」

「どっかの先住民だったと思うが」

やや乱暴だが。内容からして自己満足的な民主主義であるらしい。

「それと、アフリカ宣言がナンなんだ」

話が当初に戻った。

「ウオクトワイスは高尚過ぎるって事だ」

強引な帰結にいたる。

かつて、いくつかの経済大国が、彼らの搾取により疲弊し破産した国々を買い取って、国境を消していった。それを可能にしたのは、各国にまたがって利益を吸い取る多国籍の軍産複合体である。

その巨大企業が、先行していた宇宙開発と共に、目玉事業として

着手したのがアフリカの緑化計画だった。新しく希望に満ちた未来をイメージさせて、「新生地球」を華々しく宣伝し、そのうねりに乗じたように通称アフリカ宣言と呼ばれる「無国境化宣言^{ポーターレス}」を行ったのであった。

しかし、買い取られたかつての国々が、経済的立ち直りを見せると、いわゆる民族主義^{ナショナルリズム}が台頭してくる。我々固有の伝統や歴史は、独立によって未来へ残すものである。独立運動は武力をもって立つた。

そして戦争へ。

「おかしいよな。人類は雑種化してるんだぜ？」

世界的な混血化については、ポーターレス推進にとって良い原動力となるだろう。

キースは、ざっと回った滑走路から本舎へ向けてハンドルを切った。

遠目に、ヘリポートへの着陸が認められ、既に幾人かヘリに向かって走っていた。

誰が来たんだ、と嘯きながら野次馬的に挨拶すべく、車を滑らせる。

ローターが回ったままのヘリから降りてきた、一人の人物に見覚えがある。

「よお！」

太陽を背にしたキースを眩しそうに、振り返った男はにこやかに笑った。

バランスの取れた長身に、紺のスーツ、陽の光で赤く輝いて流れるブラウンの髪を押さえて、笑顔はさも優しそうに、彼の雰囲気を整えていた。

「キース？」

「クライン！ どうした、スーツも似合うが民間企業人になったのか？」

「いや、会社は変わらないよ。ウオクトويسから命令でね……もしかしたらサラリーマンになれっていう辞令かもな」

「緊急か？…だが何にせよ久しぶりだ。今日のことは日記にちゃんと書いておくさ。ウオクトويسよりは、前線基地のほうが楽だろうに……」

「ハハ……お気遣い無く。本国には君が最前線勤務希望だと、強く進言しておこう」

優しい青年は、踵を返して片手を挙げ、キースに「また」と挨拶した。

ヘリが吹き降ろす風が、また彼の髪を乱した。

「オトモダチは、ちゃんと同僚にも紹介するもんだぜ。誰よ？」

「昔の同僚…と言うか上司と言うか」

「上官？いいねえ。あの若さで、高級軍人まっしぐらじゃないか」

「クライン・カーノヤー大尉だ。いや、もう少し偉くなったかな」

「カーノヤー？」

「知ってるだろ。将来を考えるならオトモダチは大事にするもんだ」

キースはウインクして、別の飛行機に乗り換えるクライン一団を見やると、再び車を走らせた。

もっともクラインは、そんな付き合いをする男じゃないが。

戦場を共に駆けた人間になら、少しは理解が出来るのだった。

ウオクトويسは、黒海沿岸に建てられた半ば水上都市にも見えるメガロポリスである。

二人の建設者の名をとって付けられたこの都市は、水面に飛び出た部分を中枢エリプと呼び、そこから放射状に橋やパイプラインが伸びている先をサイドタウンという。

「造船ドックが火災にあったそうだな」

エリアの政庁舎の一室。

あまり公にしたくなさそうな雰囲気で、二人の男が立っていた。

「支障は無い。他の工場に空きがあるから、ラインを移すつもりだようだが」

興味のカケラも無さそうに、ユロは応えた。

「物を載せるだけの船を造るよりは、次世代マシンの開発が大事だろう。予算も組んでいるし、役員会の承認も得ている」

「それなのだが……暫く凍結できないものか？ ブルーネットのポンプ修理に手間取りすぎる」

「あれはもともとレンロウの受注区域ではない」

「委員会が懸念している。行政官の私としても決議に拘束される身だから、こうして“お願い”している」

「ゲルハルト……実権の無い政府に、物言う口があったとはな」

「企業が法治国家を目指した結果ですよ。私は調整役だ」

精悍で堂々とした態度の男は唇の端を僅かに歪めた。

「それでなくても、ハーレイ・クラファへの供給は滞ってる……先日投入された第五世代チームの戦力を見てから決議に遵守するか、時間を掛けてもよいだろう」

「サハラ計画が経済的理由で行き詰まりを？」

「利潤の追求が商売の基本だ。それをコントロールするのが政府ではなかったか」

「売国奴まがいの行為は慎む、良い模範になつていただきたいですな。第五世代の^{フィフス}アフリカ投入もレンロウの意見を尊重した。」

「その言い方、まだ地図上に国境線を引いているように思える」

「少なくとも、あなたにはなさそうだ」

ゲルハルトに、いくらかの和らいだ空気が流れた。

レンロウ・グループの暴走は食い止められると判断したからだ。

世界統一の夢を追う、ウォクトويس連邦の潜在的な離反は避けたい。

「自分の利潤には疎いのが妙な官僚だ。ゲルハルト・カノーヤー」

“ダブル・イノセンス” (白の功罪) The ORPAHN II

食えない顔で、
ユロが友人を評した。

8 クラインの「帰宅」

郊外の高級住宅街にリムジンが一台滑り込んで、そのうちの一軒の前に止まる。

車から人が降りるのを待ちかねたように、若い女が門扉を開いて急ぎ足に近寄った。

「クライン！お帰りなさい」

豊かな笑みを満面に、青年の腕を取る。

「ただいま帰りました。 薫」

抑え気味な感情は、いつものことだ。

「いつも急だわ。 ゆっくりできて？」

「今日半日だけの休暇です。 今夜は泊まってよろしいでしょうか」

「いやあね。 遠慮はしないで。 家族なのに他人行儀なんだから……」

…ゲルハルトは知ってるの？」

「父には知らせる必要はないと思ってますので」

控えめに、父を否定する。

「デイトマも忙しい人だし、ホントにこの家の人たちはご多忙でいらつしやること。 新妻の私を放っておいていいものかしら」

アタツシユケースを運転手から受け取り、クラインの背中を押しながら薫はリビングに通した。 家政婦にティーを頼むと、上着を取って座らせる。

「デイトマは相変わらず研究熱心？」

「そう。 熱中しすぎて、この家が遠いせいか彼女のアパルトマンに泊まりっぱなし。 まあ、いいオトナだから私が言うことではないけれど……」

「父は、良くしてくれますか」

遠慮がちな気遣いを感じて、彼女は暖かな眼差しを彼に向けた。

「お父様を心配してくださってるのね。 嬉しいわ。 ええ、ゲルハルトは私を愛してくれているし、私も間違いなく愛してるから。 幸せ

よ

背中まである長い黒髪をサラと揺らして、ティーを注ぐ準備をした。「せっかくだから、少しは母親らしくしたほうがいいと思って」

薫はクラインの継母であり、クラインの父ゲルハルトの妻である。

数ヶ月前に結婚したのだと、事後報告が薫から来ていた。

クラインが幼い頃からの古い知り合いで、カノーヤー家の良き友人であったものが、妻亡き後にだいぶ経ってからゲルハルトの伴侶に納まつたらしい。

「今回はいつまでウオクトワイスにいるの」

「……………それですが…デイトマと仕事が絡みそうです。詳細不明なので、明日でないと何とも…」

「エ……………ああ！」

仕事柄、機密の多い一家である。

薫もすぐに理解した。

「じゃあ、今晚だけではないのね」

「たぶん」

曖昧にしながら、冷めないうちにカップを手に取り紅茶を口にしました。

家は、いい。

そう感じたのは錯覚だったか。

しかし、少なくともここでは人の死がない。

(疲れているのだろうか……………)

昼下がりの光が、アール状の窓からつつましく射し込む。

大小の熱帯植物を配置し、東南アジア系のリゾートを醸し出すインテリア、以前はこんなに情緒豊かな家ではなかったが 薫と言う住人を得て、彼女の趣向に染められたのだろう。

薫は、久しぶりに会ったクラインを詮索するでもなく、ただ窓の外を見つめていた。その静寂……………。

女は沈黙に耐えられないもの、との評は、薫には当てはまらないのだった。

「……奥様、お電話が入っておりますが……」

なるべく雰囲気壊さないよう、努力して家政婦が声を掛けてきた。

「出ます。どちらから?」

「デイトマ様でございます」

「あらっ。二日ぶりね」

カチャとカップを置くと、いそいそとラウンジの奥へ行く。

「デイトマ? 連絡もいけれど、顔も見せて欲しいわ。それともクロエのアパルトマンに家具一式送りましょうか……」

低めに、だが快活に笑う薫の声は、眼を閉じたクラインの意識に聞こえてはいないが、音響の良い邸内ではふと耳に届いてしまうものだ。

「……いいのよ、デイトマ。……あの子は元々神経が細くて優しい人だから 無理して来なく……ええ。いつまで滞在するかまだ」

自分の話題だと気づいたのは、薫が通信を切ってからだった。

「兄は来るのです?」

席に戻ってきた薫に、クラインは聞く。

「クロエと食事の約束していたそうよ……今夜は、そうね……暖かいようだから、テラスでディナーにしましょう」

ニュアンスからして、ゲルハルトは出席しないようである。

洞察力に長けた、薫の対応はうれしい。

反面で心苦しいのは、隠したものを他人には見られたくない衝動に駆られるせいだ。

片付けるわね、と自分でカップを載せ、ワゴンをダイニングへ運んでいった薫の足音を背に、クラインはまどろむ。

双子の兄デイトマと、亡き母と、父ゲルハルトが、揃って家族をしている。

自分もそこにいるはずなのに ……話を聞いて…。
クラインは、もがいた。
溺れているかのように苦しいのに、皆は笑っているばかりで手も
差し伸べてくれない。

た・す・け・て。

叫んだ。

しかし、クラインの口が言ったはずだったが

“タスケテッ!”

女の声で漏れ出る。

(誰だ…)

“お願い! アタシを助けて!”

必死の形相で、女がクラインの腕を掴んだ。

(!)

”あなたが!”

「クライン」

優しい声が耳元に響く。

「クライン。起きて?」

もう一度、クラインを呼ぶ声がした。

「ア……」

「どうしたの… 食事の準備ができたのよ。 少し夢見が悪かった
よね。日が差してたから、暖かいと思ってタオルケットも掛けな
かったせい?」

薫が覗き込んで、彼の髪を撫で付けている。

多少の冷や汗を感じながら、クラインは体を起こした。

「夢を……いつものことです」
嘘をついた。

「……そう……無理とは思っけど……ここでは誰もあなたを殺そうなんて人はいないのよ。安心して甘えて さあ、着替えてきて」
用意された部屋で、クラインは堅苦しいスーツを脱ぎながら、

（あの女………？）

夢でしがみついていた女の顔が浮かぶ。

知った顔のようだったが………思い出せない………。

しかし、何となくこの先、災いになりそうな禍々しい色を為す夢をしていたのは感じる………。

9 家族の在り方

どれくらい眠りこけたのか、自分の手首を持ち上げた。時間は夕刻を過ぎていて、ふと探した部屋の時計よりも、腕時計の針が少しばかり進んでいるのを直す。

正確な時間を要求される仕事で、進み癖のついた時計はまずいだろう、と言われたことがあったが、腕に馴染んだ感触は取替えずに來ていた。

自分の時間が早く進んでいるような、急かされる感覚は止めてはいけない気がする。

「口に合う？私はあまり飲めないから、見立ててもらったワインだけど」

テラスにセツティングされたテーブルと椅子に、贅沢な光を放つ蠟燭を立てたクロスの上を、いくつかの皿が取り替えられた。

「そんなことは……このもてなしに、文句は言えないでしょう」

「でも、あなたは白のくちね。この辺はデイトマの分野だし」

庭の木々の向こうには、エリアの輝く摩天楼が煌いていた。

どうにかこの安寧に浸りかけ、少しクラインの口は饒舌になったのだろうか。

「いまさらですけど、改めて。結婚おめでとう、を」

薫は小首を傾げて、薫はニコと微笑んだ。

「ありがとう。でも……私にだけお祝いしてるのね、それ」

心配りをしながら、ストレートな物言いは彼女の性格だ。

「ゲルハルトは、あなたにも祝って欲しいのだと思うけれど。母親って、いつも子供と父親の仲介役をするものなのかしら」

「父は……忙しい人ですから……」

クラインは、言い訳をする。「それに、貴女と言う伴侶を得て、よりウオクトワイスの飛躍を望めるようになったでしょうし」

「クライン……」

「貴女は、母よりも外交的だし、父をよくサポートできるでしょうから……」

「クライン」

強めに、薫は彼の名を呼んだ。

彼はフイと視線を逸らす。

「私とゲルハルトの愛情の在り方を、勝手に歪めないで。私たちは政治のために結婚したのではないのよ……彼は政治のトップで戦う人だけど、戦う英雄の妻は共に戦わねばならないの？ おかしいわ……私たちはそんな気持ちで一緒になつたのではないのよ。ただ彼に好意を持って、一緒に居たかつたから、それだけの理由」

「しかし、いつかは貴女も利用しようとするとは考えない……？」

「いいえ。個々の意志は自由であるべきことを、私が証明します」

「

薫はそこで、悪戯っぽい瞳をした。

「クラインは深刻になりすぎ。人の愛情は、もつと簡潔に考えないと呪縛に囚われてしまうのよ。あなたも誰かを愛してみたら判るわ」

強い女性、と見るのは間違っているのだ。と、クラインは改めて思う。

恐らくはこの一家に、どの友人たちよりも受け入れられていた薫の存在は、幼い頃から少しだけ遠くに見えるようなものだった。

客観的に家庭内を覗き込めた彼女は、誰よりもカノーヤー一家のことを知っている。

自分が今現在、こんなにもシニカルな気分なのは、幼少時に母以外で一番身近にいたこの女性に、憧れめいた気持ちが無かつたわけではない事を思い出したからだ。

特別な愛情の対象ではなくても、大事な宝物だつたかもしれない記憶が、けして仲が良いとは言えない父に踏みじられた気もしている。

これが父と息子の関係か。

「私は…人の愛情を受けるに値しない人間です…」
人を愛せるとも言えない。こわばったような、クラインの在りよ
う。

まだ半分以上グラスに残るワインに、口をつけて薫はホウと溜息
をついた。

「あなたは 遠くなってしまったのね。ようやく貴方とも家族に
なれたのに…」

深く沈んだ海のような瞳で、薫は寂しそうにした。

そんな愛情をも、受けれているのが難しいクラインなのである。

家族は、人間関係で一番難しい。

10 風はそよぐ先を迷う

井上が来たというので、会議場には話がてら二人で行くことにした。それを狙って、彼も早めに現れたのだろう。

雲の多い天気、風が強かったが、カートを使わずに歩くことを選ぶ。

「インドから極東に行ったかと思っていたが、戻ってきた。ワケではないな」

「内容は知っているでしょう。私も『ヴォロス計画』の一部に組み込まれてますから」

「……君の父上の差し金でないことは」
「知っています。そこまで父も権力を行使しませんよ」

公然の秘密とも言えない会話で、父との微妙な確執を隠さないクラインである。

「気を遣ってるつもりもないが、いま『ヴォロス』には若い世代でなくては対応できない事実がある。表向き公募だっただろう？」

「誘いがあったので、推薦してもらっただけです。結果、能力があることは証明できました。少しは使い物になるみたいです」

「俺には自慢にも聞こえんな。どうにも死に急ぎとしか見えないのは、俺だけではないだろうよ」

精悍な顔に笑みを浮かべて、クラインの肩を叩いた。

「しかし、家族だな。デイトマからも同じ計画で技術面のサポートが得られる。心安く頼れるのは否定するなよ。不具合で遠慮なく文句が言える。昨日、会ったか？」

「いいえ。兄も個人的に付き合いがあるようでしたので……昨夜は薫にだけ」

井上が個人的な配慮で話しているのは、分かっていた。

クラインとは十以上の年齢差があるが、父ゲルハルトも絡んでの旧友である。双子の兄デイトマよりは、より兄的な付き合いで理解

者ではあった。

ただ、自分の周りの人間には、いつも父の影が付きまとう。

意識し過ぎかもしれない。

だからと言って存在を消すことは無理である。

権力者を父に持つというのは、時に精神的な負担をもたらす。

「そうか……ところで、第五世代ファイフスはテスト・パイロットが試験的に作戦投入されているが、お前は第五世代ファイフスの専属になれそうか？」

「コンビネーション・テストのセミナーまでは受けました。現時点でこの場に呼ばれた事は、選から漏れたのだと思いますが……」

「そう素直に考えるな。人事も正しく機能しているわけでは無さそうだぞ。G・B・Nにグレート・ブルー・ネットまともな部隊指揮官の居ない処が発生していた。部隊編成の不手際が露呈してしまっただ。まともな頭があれば、お前も呼ばれるだろう」

「異動だけに忙殺されそうですね」

「そう皮肉るな。今居る職務は閑職ではない。適当な知識を持ち出してから前線で使え」

「そうします」

井上と話しながら、クラインは何気にスッキリとした気分であるのを意識した。

眠りの浅い彼にしては、珍しく熟睡したらしい。

「……………ッ！ごめんなさい！」

ぶつかってはいいないが、早合点した声が上がった。

見れば肩まで伸びる黒髪の少女が、慌てて地面を這うように手でまさぐっている。

「いや…私に被害は無いが……」

返しながら腰を下ろして、散らばった物を集めるのを手伝う。

「あの、いいんです。私がちゃんと見てなかったから」

井上が彼女の着ていた赤い制服を見て尋ねる。

「ラボに居るのか？」

「はい。研究生です。…じゃなかった…テストから戻されてきたものですか…」

「ふうん。パイロット？」

「そんなところですか。ありがとうございます」

クラインから受け取って、少女は頭を下げると駆けて行った。

その後姿を見やって、井上は笑った。

「彼女が例の犠牲者かもしれん」

「まさか」

「ありえない話ではないだろう？」

「……………否定はしませんか…」

「俺は、お前も犠牲者の一人だと思っているよ」

「哀れみですか」

「…こういう時流に生まれてしまったってことだ」

彼の辛辣な言い草には慣れている。と思おうとしたが、やめた。慣れるとか反発するほど、人間関係に深入りしていないからだ。

「諦めも肝心ですよ…」

クラインは受け流した。

「素直そうで素直でない奴」

相変わらずの年若い友人を、屈託無く評する。

常々、懸念があつた。

井上は、この計画の一端を担う人間として、第五世代ファイフスの予測し得ない戦力を期待はしているが、一抹の不安を心に隠す。

「ゲルハルトが望んだと聞くが、第五世代ファイフスに至ってまでも実験の位置づけを離れないのは」

「兵器とは常に開発途上にあり、いつの時点でも実験であるとの認識だろっ」

「通常、将兵には愛国心を始めとするイデオロギーの刷り込みと、所属するところへの忠誠を叩き込まなくてはならない。思想教育を

施さない者を戦場に送り込んでしまつては、危険ではないのか？」

「技術の漏洩も考えなくてはならないが、高学歴のエリートが扇情的なプロパガンダに染まりやすいのは、歴史を鑑みれば明らかだと言つのだ」

「では彼らに歴史を選択させると？しかし、戦勝を上げるか死ぬかの瀬戸際で何の利益が」

「……歴史の選択肢を与える……そうも言える。多様で多元的なものの方をするのは悪いことではないだろうか？と、言えば、私は賛同者にされそうだが、一理を認めているだけだ」

「ですが、若い、と言つただけで扇情的な存在でもありません」

「選択だよ。思考をコントロールする一元的な教育では、思考が停止する。多元である事を教えて迷わせ、そこで得た答えが力となるそれを本人自身に選択させる。理屈はこうだ。敵方になつても止むを得ないだろう。だが、第五世代フィフスの指針だ」

「理論どおりに行けば、第四世代までは“失敗作”になりますね。反対はしません。戦場で迷いが無い事を祈ります」

「望みたい事だが……」

少し前の事を回顧して、なるほどと思った。
迷っているのがある。

11 その眼差しと、戸惑いに

バタバタと駆け込んだ先は、使えるのか使えないんだか、様々なマシンのようなものが転がる異世界だった。

一瞬躊躇したが、勇気を出して踏み出す。

「デイトマ?...ああ、あっちにいるよ」

つなぎを来た男に顎で指されて、恐る恐る声をかける。

「俺?」

素っ頓狂な応答に、いささか拍子抜けした。

「レジノ先生から...ことづけで...」

「あゝ、そう。ありがとう」

そっけなくお礼を言うが、その風貌のせいか嫌味にならない。

「君、ラボに居た子?」

「あ...ギリシャ研究所からですけど」

「へえ。『パルテノン』から来るなんて、珍しいな」

「アフリカから戻されて来たばかりで...」

ふうん、とデイトマはお使いの少女を見つめた。

「ッてことは、期待されてるパイロットなんだな。名前聞いていい?」

「シャトレイサです。作戦投入されたんですけど、コントローラと

相性が悪くて...調整を受けてます」

「それは俺の分野じゃないなあ。クログエがやってるトコのかな。あ、

俺ね、『ヴォロス』のマシン製作に携わっているデイトマ・カノー

ヤー。君...シャトレイサが第五世代なら、俺の愛がこもったマシン

に乗ってるかも」

「その第五世代ファイフスです。ごめんなさい。あまり上手に扱えてないみた

いで...」

恐縮するシャトレイサに、デイトマは汚れたつなぎを着、乱れた

ままの髪で人懐っこい笑顔で、何の、と言った。

「誰だって完璧な奴はいないよ。敵も味方も必死で戦っているんだから、マシン一つで悩んでたら負けだ。生き残ることだけ考えるよ」

初対面で、マシンを組み立ててるだけのエンジニアぐらいにしか見てなかったから、シャトレイサには軽々しく言ってるように感じた。

個人の重大な感じ方が、適当な慰めにもならない言葉で決め付けられる。それは勘に触る。

(アタシは……まだ死体を見てない……)

おぞましくも受け入れなくてはならない、生々しい現実を知るには、それが手っ取り早い方法だと思っていた。

「それで、コントローラと、なぜ相性が悪いと思うんだい」

唐突に聞かれて反発心とは裏腹に、シャトレイサは答えていた。

「なぜ……って……あれは、私を頭から押さえつけて従属させようとするんです。従えば楽になって簡単に言われますけど、それは許されないことに思えて」

答えながらも、酷い言い訳をしているように思える。

「それって、我が強いつて言うか、プライドが高いつて奴だね」

裏を返せば防衛心が強く、または臆病……とも言っかな」

ストリートにデイトマは言ってるのける。

「否定はできませんけど……」

自分でも思い当たってることだが、他人の口から出るのは許せないところだった。

だからと言って反論の術も無いのが、シャトレイサである。

「……失礼します」

早々に退散を決め込んだ。

この人は嫌いじゃないけど、嫌い……。

断わりも無しに、自身の領域を踏みにじられた痛さを感じた。

もちろん、被害妄想もいいところだろう。

そんな小柄な少女の後姿を見送って、デイトマはちょっと溜息をついた。

「どうした？何だそれ」

同じ格好のメカマンが、興味深そうに近づいてきた。

「あ、これか。レジノからのお土産だろ」

「旨いもんなら食わせるよ。あの子、パイロットかい？」

「そうらしい。……ああいう子も戦場に出るんだな」

「何か神経質そうじゃないか？ヴォロスのだろ？」

「第五世代だよ。ウオクトワイスの期待を背負う星さ」

「何を基準に彼らは選ばれたのかねえ」

他愛なく、他人事の会話ではあるが、デイトマは少しだけ引っかった気がした。

(あの感じってのは……クラインみたいなヤツ……)

「でも、俺の弟も彼女と同じくらいの歳で、戦争に放り込まれてるからなあ……」

「厳しい親父さんにか？」

「俺は“徴兵”を免れたけどな。ああーまた俺、一言フォローにならない事言つたなあ」

冗談の雰囲気を作って、軽く収めた。

ただな、

親父が期待をかけてたのは、弟だったんだろうが

嫌悪しながら、優しい眼差しを感じるのを背に置いて、シャトレイサは研究所の教室に戻りかけた。

(嫌な人に会った……)

自分に下手な言い訳をして、かすかな動揺を誤魔化した。

(忘れなさい。忘れるの。覚えてたら恥ずかしいことじゃない……！)

膝周りに纏いつく、赤い制服のタイトスカートが気になる。

脇の布地を一握り、掴んで裾を持ち上げると大またで爪先を出した。

彼女の歩く癖は、他人の視線を気にしたような歩き方をする。

誰にも声を掛けられないように、なるだけ忙しいように、真っ直ぐ前だけを見るのだ。そうすると周りの人間は遠慮して素通りしていた。

増してここは以前居たギリシャじゃないから、ソトーやミレイヤも居ない。

(いやだな……どうして歩いてるんだろ……)

早く自分の場所に戻りたかった。

カート・プールに丁度、一台入ってきたので逃げ込むように、車内に体を滑らせる。

狭い車内は、時に居心地が良い。

闇雲に走りたくなった。

このカートでは研究所から出られないが、『パルテノン』研究所より更に広大な敷地のため、乗り回すには充分である。

手の込んだ庭園内を走らせていると、シャトレイサがぶつかりそうになった二人の姿が見えた。

「のんきに歩いてる……」

もちろん、二人の事情など知らない。

さつきは慌ててよく見てなかった。

そのせいもあって、何となく凝視したのかもしれない。

……………風がよぎった。

「シャトレイサの乗る、カートが起した流れだったか。」

一瞬にすぎない時間に、ダーク・ブラウンの髪色をした青年が振り返る。

互いの視線が、交差した。

(誰かが……見ている)

自分の居る空間だけが止まったように、体が硬直したみたいな錯

角が彼女を襲う。

(……違う……？知っている……？)

自我を抑えたような、そんな彩いろの瞳から、洩れ出た感情の揺らめき。

(……知ってる。この人は……あなたも知ってるでしょう……)

手を差し伸べれば、相手も差し出して捉えてくれそうな近さを感じていた。

何かが融合して、ゆっくりと融けていくような気だるい心地よさ。

ワタシハ、ココニイルカラ……

心惹かれる甘さに似た、ほんの二、三秒の時間で、スイ、とカー
トは彼の後ろ数メートルを通り抜けた。

不思議な感覚を残して、二人はすれ違う。

Mission 1 解説・粗筋

こちらは主に携帯向け資料です。

この資料は追記による改編の可能性があります。

PC向資料は各ページ下部にリンク設置

キャラデザJPG

主な登場人物

シャトレイサ・シアノグラ(19)

ウオクトワイスの『ヴォロス』テストパイロット

黒髪・紫の瞳

いじけやすいが頑固な性格、直感的で気分屋な部分も。

クライン・カノール(26)

ウオクトワイス軍大尉

ダークブラウンの髪・青い瞳

地道に任務はこなす真面目そうなタイプ。

オウス・トラッド(25)

ハーレイ・クラファ軍中尉

濃いシルバーブロンドの髪・赤紫の瞳

直情径行ではあるが、パイロットとしての腕はエース級。

フレニー・トスパノレ(21)

ハーレイ・クラファ軍少尉

朱色の髪・薄い緑の瞳

オウスのお守り役らしい。

あらすじ

幾つかの経済大国が、禁治産に追い込み疲弊した経済ごと国々を買収したあと、アフリカ緑化計画に倣って、新生地球を謳った通称「アフリカ宣言」を行い、国境を消したはずの近未来地球。

しかし際限なく歴史に繰り返されてきた「民族主義」が台頭し、世界は統一国家派と地方自治民族独立派に二分して戦争が始まった。

軍産複合体は、そのどちらにも利潤を求め、お決まりの兵器開発と売却に勤しんでいる。

シャトレイサ（主人公）は、ウオクトワイスの最新兵器パイロット候補生として特別な機器を使用する訓練を受け、試験的に戦場へ投じられたが、拒絶反応のために研究所へ戻されていた。

クラインも最新兵器の部隊編入の是非を問うために、ウオクトワイスの実家に帰ってきていたが、権力者の父と結婚した新妻の薫とは何となくこちない。

旧友の井上はそんな彼が心配でもあり、最新兵器の取り扱いについて、戦況と政局も気がかりであった。

それぞれに精神的な壁を持つシャトレイサとクライン。

何の因果か、そして二人は出逢った。

設定

アフリカ宣言

ウオクトワイス政府が打ち立てた無国境化宣言。

G・B・N・(グレート・ブルー・ネット)
アフリカの砂漠地帯に海水を引いて作った人口の川。
途中にポンプ基地が点在する。

ウオクトワイス

黒海沿岸に作られた大都市。

都市建設に携わった二人の名前をくっ付けただけの名前。

ハーレイ・クラファ

統一国家派に対抗する民族自由主義を信奉する勢力。

ヴォロス

ウオクトワイス軍の近代兵器。

車台と戦闘機がくっついたような不思議な形状の重型アタックバ
イク。

更に不思議な事にハーレイ・クラファにもある。

思いのほか丸っこい機体が上手く着艦できたのを見て、オウスは他人事ながら満足していた。

「ローズ・ブラスト」！相変わらず滑らかな操縦だ」
スライドしたキャノピーから、パイロットが顔を覗かせて手を振る。

「フレニー、生きていたな」

ヘルメットを取ったその下から、長い髪をまとめ上げた女の顔が現れた。

「アア！オウス、懐かしいわ！」

はしごを使わず軽やかに機体を伝って、オウスが広げた両腕の中に飛び込む。

「待ち焦がれたよ、俺の女神」人目を憚らないのは、彼の悪くは無い性格を現している。「体はいいのか？」

「ちよつと骨を折っただけだわ。オウスこそ無理して迷惑を掛けない？」

甲板にいたスタッフが、その二人を見て口笛を吹いた。

「出来てんです？」

「ん？……そうとしか見えないことも無いが、とても信頼しあっているパートナーだ。だがお互いそれで恋人ができないのかもな」

下世話な話は、オウスとフレニーの耳には届いてない。

フレニーの肩を抱いて、オウスは駆け寄ったスタッフに、機体の格納を言いつけた。

「私が居ない間、誰にも迷惑をかけてない？」

「俺が働かないもんだから、追い出したがつているよ。お前以

外に使える奴もいない。新しいマシンはどうだ」

「まだ慣れてないから……でも大丈夫。性能もいいし期待しているわ」

女性だから気を遣ったのか、なるべく早く日陰にはいる。

艦橋からその様子を見ていたマイレアは、双眼鏡をカウンターに置くと、コーヒーマスターのカップに手を伸ばした。

「あれがフレニー・トスパノレ中尉か？」

「は…オウスとはすこぶる相性のよいと噂で」

「ふん……」

特に興味もなさげにコーヒーマスターを口に含んだ。

「二人で一つと言うが……ロンワイならば独りで戦えるというのだから」

数分後に彼らはマイレアに挨拶に来た。

反抗精神旺盛そうなオウスに比べて、フレニーは優しく温和な印象を受ける。彼女がオウスの守り神、という話はまんざらでも無さそうだった。

「こちらに着艦許可いただきまして、ありがとうございます。フレニー・トスパノレといいます」

少女のように微笑んで、手を差し伸べた。それを握り返しながら、マイレアも自己紹介した。

「宜しく。私はマイレアだ。ここの艦長を務めている。重傷を負ったと聞いているが、良いのか？」

「骨折は重傷のうちに入られますけど、接合すれば支障は無いものです、艦長。すぐにも作戦に出られます」

「君はハーレイ・クラファのエースの一人だ。大事を取って英気を養ってもらわねば困るな」

「ですが、あまりゆっくりもしてられないので……三日ほどお時間いただければ調整済み次第、原隊に復帰したいと思っております」

マイレアはフレニーが戦場に戻りたいのではなく、オウスを早く連れ出したいのだと感じた。まるで母親のように、やんちゃな息子の扱い方を知っている。

「も少し休めないのか」

「気遣ってオウスも言うが、フレニーの言うことには何でも聞きそうな雰囲気だ。」

「体が鈍ってるの。オウスも鈍りそうでしょ。あと……“サイドワインダー”が寂しがってるわ」

「そつと急かす空気は、やはりマイレアが読んだ。」

「パイロットが心身鈍ってはいかな。フレニー中尉が行けるといふなら、尊重しよう。ここにある備品と人材は好きに使うがいい」

「親心を知らない子の様な、オウスの何処かデリカシーに欠ける幼稚さが気にかかった。」

「年齢から人間を判断するには、危険が伴う。」

(しかし充分なオトナじゃないか……)

「ローズ・ブラストは、まるつきり取り替えたのか？」

「取り替えたんじゃないよ。機体そのものが以前のローズ・ブラストじゃないのよ。サイドワインダーは改造を加えたのだけ……オウスが我儘を言うから……」

「フレニーが搭乗する機体に手を掛けながら、オウスが不満げに踵を鳴らした。」

「アレを使えつて、あれじゃ俺の戦歴を否定されるものじゃないか。どれだけ敵を感知して防御できるっただって、所詮は人が作った機械だろ。どこまで信用できるんだ？ クスリも使うんだろ？ 適応できるように？」

「より敵を倒すためなら仕方ない事だとは思うの。ウオクトワイスは既に導入を進めていて、前線に配置済みと聞いてる。もし“万が一”の事があつたら、あなたは負けを認める？」

「言葉に詰まったのは認める。」

「だが体裁を整えて自分を奮起させるためには、これしかなかった。」

「俺には、お前がいる」

フレニーを抱きしめて、オウスは自分のために呟いた。
彼女は、瞳に翳った不安の色を、巧みに隠した。

イズメイがカティアと会ったのは、数ヶ月くらい前、としか覚えてなかったが、アクの強そうな部分を本能的に嫌ったのか、多少の印象が残っていたことで記憶に留まっていた。

「強情張れば、筋が通ると思ってる女だ……」

顔全面に我儘を貼り付けた判り易さは、面倒なことに、いつまでも鼻につく。

「ニューデリーからウオクトワイスへ何が何でも赴任したいと、意味のない異動をゴリ押ししたというじゃないか」

めんどくさそうにペンを投げた。

「そうですか？仕事熱心で良いと思いますよ」

「俺は猜疑心の強い男だから、何でも物事を斜めに見るさ。人間なんて疑わなきゃならん動物だろう」

「悪い噂は聞いてますが、そんなに悪いもんですかね」

増して、女だから、だ」

「はぁー……色々懲りたんですか？」

「うるさい。そんな話じゃないんだ」

「ですね。と、言うか……その女の特技ってなんです」

「技術系だ。技官ではなくて、民間出身で今や半分軍属もいいところだろ」

「でも技官扱いですよね」

「もう、どうでもいい」

イズメイは、もう一度ペンを放り投げた。

「あいつは悪女だぞ」との評は、いずれズレが生じる事になる。

13 ヴオロス・チーム

誰にでも性に合わない人間は居る。

初対面であるとか、第二印象が悪いとか、後々のトラブルでの本性が露わになったりとか、理由もタイミングも様々だが、第三世代のパイロットであるジョールは、最初からシャトレイサが気に食わなかった。

理由は二つある。

彼は通常の将兵と同様に訓練や教育を受け、そして最新兵器を駆るエリートとしてのプライドがある。だから、彼から見たら生半可に教育を受けた第五世代が鼻につくのだ。

その上、そのヤワな連中が、ジョールたちの兵器とは明らかにポテンシャルの異なる体系のマシンを扱うとなれば、知らず嫉妬も湧いてくるというもの。

二つ目はなんとなく根暗に見える、いじけたような性質が「ただ単に気に食わない」、いじめ的なもの。

「シャトレイサが居なくなっせてせいせいしたさ」

ランド・キャリー「イバロ」が格納されたドックで、ジョールは吐き出した。

「でも、戻ってくる可能性は高いのよ。除隊じゃないから」

第二世代のレジーヌが釘を刺す。

「……チ…冗談じゃない」

「冗談で済んだら戦争は起きてないでしょ」

年上の女性が言う事が、いちいち尤もでイライラが募る。

「コマンダー制の採用つても気に入りませんよ。だいたい、なんで彼ら第五世代だけでチームを組まないんです？ 敢えて旧世代と混合する必要が？」

「特別扱いが気に入らないなら、適性検査受けてみる？ 戦争はチームワークだし、そうした方がパイロットと一緒にマシンの経験値

も上がると、そういうことだそうよ。体系的に同じのようできて異なるから、第四世代までのデータはあまり組み込めなかったようね」

結局はレジーヌの正論に打ちのめされて終わりそうだった。

この戦争に勝つにも時間がかかりそうである。

特殊な環境下での戦争は、それに特化した独特の兵器を生み出す。

砂と礫のアフリカでは、砂に埋もれ砂と戦う羽目になる地上戦は困難であり、かといって航空戦闘機を常駐させるのも難しい。特にそれは主に爆撃であるので、ヒットアンドリターンが基本だ。機動性に富み、且つ重要な地点に待機できる機種が必要なのだ。

そこへウオクトワイヌがG・B・N・(グレート・ブルー・ネット)と言う人工の川と巨大なポンプ基地を作ったものだから、自然ハーレイ・クラファの標的になりやすく、軍を各地に常駐させなくてはならなくなった。

そこで考え出されたのが“地上も、空も”という地空両用のものである。

といつても、殆どが砂礫の移動を主に考え出された大型攻撃重バイクなのだが、脱出装置としての機能が、さして自由でもないのに「うっかり」空も飛べるものになってしまうのだ。

これだけの機動力があれば、搭乗する方も尋常ならざる才能と技術を要する。

そして数々の難関を突破し、晴れてのエリートになったのがジョールやレジーヌたち、第一世代から第四世代のパイロットであった。

しかし技術の進歩は目覚ましい。

エンジニアのあくなき探究心はそのゴッドハンドで、時に人間を超えるものを造り出してしまふ。すると新たに対応できる人材が必要になり、計画と技術を一新させた「ヴォロス・チーム」が結成さ

れたのである。

一般に将兵はその教育上、沈着冷静な判断は勿論だが、だからといって攻撃欲求も失ってはならない。この相反するパワーをコントロールするには相当の人格が必要だ。

恐れを失えばただの殺戮犯として人の道に外れる。

攻めるを怠れば防御にもならない。

感情を覚えれば己を殺す。

無駄に追わず、無駄に殺さず、無駄に消費せず、冷徹な判断力で戦場を支配し、ただ敵を排除する、そのような「知力」を持ったパイロットが必要だった。

そのような人材はどれほど居るものか？

どれだけの雁首がんくびを揃えられるか？

無理であるならば、“コントロールすれば良い”。

それが「ヴォロス・チーム」の趣旨であった。

ランドキャリア・イバロに乗艦する第五世代ファイフスはシャトレイサー人であったし、反吐が出るほどキライだからあまり近づいても見なかったのだが、シャトレイサーはヴォロスに搭乗するとき、ジョールたちとは異なった形状のフルフェイス・ヘルメットを被る。あるいは簡易のヘッドセットを何故か装着する。

そして彼女は「システム 1ワン」と口にする。

「脳波をコントロールするのだそうよ」

レジーヌが言ったのを思い出した。

と言うか、いつもレジーヌが解説をしてきている気がするが、

それは置いておこう。

「でも」レジーヌは続けた。「どうかしらね。あの子」

女の勘だと言うのか。

“ヴォロス”には特殊な機器を搭載している。それはイバロや研究所のハードに接続していて、あらゆるデータを取っているのだという。

その機器は搭乗者の脳波の動きを監視し、その場その時に適した判断が出来るよう、特に前頭葉に集中して周波数を発し、脳に働きかける仕組みらしい。

(それがイヤだって、吐いてたじゃないか、ヤツ……薬まで飲みやがって)

怪しいサイバネテイクスの産物がシャトレイサだと思うと、ますます嫌いになりそうだった。

コントローラが人を支配する ？

否、未だ実験段階であるものを、機器類が完璧であるとは言わない。山積する問題を解決したのはやはり人の手に依る。パイロットを精神的に戦術的にサポートする“コマンダー”がそれである。

数人のパイロットを束ね指揮し、規模的には小隊クラスの編成だが、第四世代までの機動性をより上回る とされる。

理論上は。

一般的な上司と部下、上官と部下や師弟関係以上に、よりフィットした繊細なものを理想とし、それには硬直したような軍規による教育は弊害になると考えられた。

だから、そういう観点ではシャトレイサを始めとする第五世代は、フィフスマシンとの融合性や感覚の鋭敏性を重視したための「甘やかされた手抜き世代」なのだ。

それはコマンダーにも求められる。

戦場や指揮の経験豊かな人物でなくてはならないのは当然ながら、どうしてもそれは従来の無骨の軍人である部分が拭えない。より柔軟で、より繊細な、言葉を変えれば“戦場に不似合いな”共感性・感受性の高いタイプが最適なのである。そのコマンダーに選別され、適性検査を受けたのがクラインたちだ。

始まったばかりの部隊は、そうして形成されつつあるが、井上が懸念したような“国家への忠誠”教育は彼らコマンダーの手に委ねられるという、何とも心許ない事態にもなっている。

今のところ、シャトレイサは現場を混乱に陥れたことは無い。それどころか、ハーレイ・クラファの攻撃重バイクを一機潰している。

ただし、イバロの指揮系統を勝手に離れた結果である。

フレッチャーは、どちらかと言うと寛大な艦長だったから、すぐに指揮下に戻ったシャトレイサについて目をつぶった。それもこれもテスト・パイロットであるせいなのだが。トップダウンの組織として問題になるのは時間の問題とは言え、如何ともし難い。第五^ス世代の「意図」が分からないうちは、触れないでおくのが得策と言うものであるからだ。

「何だか薄気味悪くってね」

そう感じているのは、恐らく誰でも同じだろう。

「コマンダー無しに、シャトレイサたちが現場投入されたことについて、聞いてもいいですか？」

ライナル博士は、ファイに呼び止められて背後の少年を振り返った。

『パルテノン研究所』は今日も快晴だった。さぞかし地中海も美しい海に色を醸し出している事だろう。

「それは……」ソトーだったので、彼は多少視線の仰角を下げる事になった。「誰が権限を持っているか、と言う話になるんだが、聞いて見るかね？」

賢そうな少年はエメラルド・グリーンの瞳に険を差して、真っ直ぐに見つめ返す。

「だから貴方に聞いているんです」

「いや……、私はあくまで助言の立場にあって、オブザーバーも同

然の……とか言ってみようと思ったんだが、さすが“ヴォロス”のパイロットだなあ」

のらりくらりとソトーを遣り過ごすように見受けられるが、実はコレでもライナルは真面目な返答をしている。常に研究の事で頭がいつぱいの人間は、時に周囲の人間との調和を忘れる。

「で、それはシャトレイサたちの“仲間意識”から来ているのか？」

自然、返す言葉が研究目的の探りになるから、ソトーも少しは勘に触ると言うものだ。

「あなたの一言が、シャトレイサをアフリカに投入することになったのは知ってますよ」

「君も出しても良かったんだが、彼女の方がクセがあったから、面白そうだと思った。じゃ、済まないか」

腕組みをして少年の様子を観察した。

“ヴォロス・チーム”の生徒達は感受性を重視しているために、その個々の感じ方を知るには重要なのである。

「“純粹培養”ってのは悪い事態に陥る事が多くてね」

「パイロットが、ですか」

「色々と、何もかもが初めてでね。地均^{じな}しは必要だろう」

ライナルはあまり暇ではなかったから、その場はソトーに構ってやる時間は無さそうだった。ありとあらゆる理由を一言に詰め込んで、じゃ、と手を振るとその場を去る。

経験豊かなオトナに対して、こねれる屁理屈の弾数が少ないソトーは、追いかけて肩を掴み、鋭く攻撃的な言葉を放つことが出来なかった。

ついでに言えば、ライナルも「明確な答え」を持っていないのを感じてしまったせいもある。

「これ以上、無駄なことを聞くなと……知っちゃってる自分もどうなんだよ……」

シャトレイサなら、一言も質問を口にする事は無いだろう。そし

て彼女は他人の命令より、自分の感性に忠実な方向へと向かう。結果として彼女が間違った事はほとんど無いがために、そのクセを知っていてアフリカに出したのだ。

「命がかかってんのに、そんなに面白いんだ……戦争」

そういう意味で、先に戦場へと赴いたシャトレイサが心配だったし、何だか自分が置いていかれた不安もあった。

研究棟を出て寮に戻ろうとした。

そういえば、いつも付きまどってくるミレイヤは居ない。

先日、ウオクトワイスの研究所に行きたいと言って、何故か強硬な反対をされたから喧嘩になってしまった。

「……いや…別にいいんだけど……」

何だか色んなものに挟まって、身動きが取れない気がした。

それから、月基地ルナベースの様子が見れる建物へ行こうと思った。

いつもシャトレイサが暇潰しに行ってたのもあるが、彼らとパイロット養成教育を受けてる間に、そちらへ引き抜かれた“同級生”もいたからだった。

平和ボケしそうな昼下がり、ライナルにも適当にあしらわれて、何だか萎えてしまったのである。

フレニーが急かすので、何となくケツを叩かれた感じのオウスは、ざっと荷物をまとめて出発の準備も早かった。原隊の仲間が通りすがりに合流してくれるというので、“此処”を脱出するのが早まったのである。

フレニーの居ないオウスは、手の付けられない暴れん坊と言うよりも、後始末の出来ない子供に近いものがあり、荒削りなエースを熟知している部隊では、彼女が負傷して療養している間だけでもと、教導隊であるマイレアのところに戻り込んでいたのだった。

厄介払い、とも言う。ただし、悪意は無い。

「ほんとにいいのか？」

気を遣ったつもりは何度目かのセリフが、彼女に溜息をつかせた。

「あなたはどうかの、オウス。ここは退屈なんですよ？」

いい加減、腰に手を当てて多少の威圧も加えなくなるものである。

「そうなんだけども……」

何を躊躇ちゅうちゆしているのか、その言いよどみが逆にオウスを鈍らせたのかと不安になった。そこで、気合の入る名前を口にして見る。

「ロンワイに、いまこれから合流して顔を合わせるよ。マイレア艦長に」

案の定、途端にオウスのアドレナリンが沸騰した。

通常のランド・キャリアよりは小型で艦載機も少ないハンガー、二人のコントが響いていた。

撮り合えず“サイド・ワインダー”によじ登ると、お泊りセットを機内に放り込み、機器チェックをいつも通りに行く。教導隊だけあって、メンテナンスは完璧に近い。

稼動せずとも内燃機関には最低限の火は点いている。

「シャシー・エンジンから上体へバイパスオープン……エネルギーをリロードする。内圧正常。“タイヤ”のモーターの唸りもいい。出艦できる」

オウスの気合いに、オペレーターが応えた。

『了解。下部デッキを開放する。幸運を』

岩盤の上に幾つものアームを伸ばして設置しているランドキャリ
ーから、二機の重バイクが勢いよく飛び出した。

彼の搭乗する“サイド・ワインダー”の機体の一部が、チカチカ
と光って挨拶をする。

瞬く間に遠景の一部と化してしまっただが、砂煙がベージュ色の世
界に二人の航跡を示していた。

日差しは容赦なく真上から垂直に、針のように突き刺さる。

「乗り心地はどうだ？ “ローズ・ブラスト”」

『慣れるしかないわ。入院中に機体が変わるなんて前代未聞のこと
だもの』

「オレは入院なんてしないぞ」

『自分がスーパーマンだなんて言い方はやめて』

悉くオウスの軽口を窺^{たしな}めているのは、何も縁起が悪いとか上から
目線なわけではない。単に油断が生まれては困るからだ。

「寝てる間に変な機械を組み込まれたことはあるけどな」

否定的な物言いをされても、意欲低下が見られないのがこのコン
ビの特徴である。

「ところで、ロンワイとの合流はどれくらいだ」

『予定では二時間後……トリポリで合流したらカサブランカで一
待機』

「飛んだほうが早くなかったか？」

『“ここで”？』

「……冗談だ。確かに“静かな激戦地”だからな……」

エネルギーの消耗も避けたいところだ。やがて平地に出ると、二
機はリビア砂漠を西へと向かう。

“静かな激戦地”が代名詞になっている「G・B・N・(グレート・ブルー・ネット)」は、ウオクトワイス統一政府の主導で行われ、アラビア半島とエジプト地区沿岸に展開されているサハラ計画の主な事業である。

人工の川を掘って海から水を引く内陸への逆流河川で、水が下流に流れないよう河川の途中にポンプ基地を設けているのだが、塩分除去も兼ねているこの基地、実はかなり故障が多い。

故障の原因は他ならぬ“塩分”なのであるが、それでも何が不都合なのか、濾過せずともポンプは止まること無く「海水」を汲み上げ続けるため、河川沿いは塩害が出ている。

この辺が数ある疑惑の中で最も明確な問題点だ。

但し、限定的な意味合いで緑化の成功している地域もあるために、「無用の長物」と批判するのも躊躇ためらわれるし、それこそ「長い目」も必要なのも確かである。

イタリア半島から西、点在的ながらも勢力内に収めてジブラルタル海峡を塞いでいるハーレイ・クラファは、間隙を縫ってG・B・N・(グレート・ブルー・ネット)に小競り合いを起こす。

少し昔になるが一度、スエズ運河も土砂で埋めたことはある。しかし出口を紅海に頼っているウオクトワイスはすぐに復旧してしまっ

た。そしてそのあまりの不便さに耐えかねたのか、「陸おかを往く船」ランド・キャリアが開発されたもこの頃である。

「この辺に“蟻地獄”は無かったか？」

同じような風景が続く中、注意判断力は鈍る。頻繁な交信も避けたいが、これが唯一の暇潰しとなれば分かりきった事も聞きたくなるだろう。

オウスの質問に、フレニーはキーを叩いた。
モニターには予めインプットされた“蟻地獄”のデータが映し出される。

「……“ローズ・ブラスト”の最新データでは、見当たらないけど……」

フレニーの機体の一部が光った。オウスの機体も同期を取って点滅する。

「ん、受信した。確かにないな……ランド・キャリドックもそうそう掘れないのか」

何も無い過酷な環境の砂漠では、ランド・キャリーの簡易基地を砂は砂の中に、岩場には岩の中や影に造る。特に砂の場合砂を被るだけで済むので、凝ったカモフラージュが不要であり、自然と一体化したそのぶん、敵には驚異となる。“蟻地獄”は、そこからついた仇名だった。

「警戒スキャンには反応も無いわ」
緊張感を失わない声で返事が来る。

何の反応も無いけど……

鍛えられた感覚がチリチリと額に電気信号を起こす。

もう少し、もう少し何か

砂上に風紋が気まぐれに作られているのを眺めながら、自然に手がコントロールパネルに伸びていった。

『飛行形態に切替えられるようにして』
押さえたような声で、オウスに言う。

嵐の前の静けさ。

これは嵐の前の静寂を指すのではない。喧騒の中で感覚を研ぎ澄ますと、自然に雑音や雑念が取り払われる、鋭敏な神経を言うのだ。

返事はしなかったが、オウスも敏感に嗅ぎ付けたのか、ホエイ上体が少し動いた。

「直進コースを外れるぞ。合流はもう少しだな」

予め設定していた迂回路に入ると、車体が傾いた時だった。

……………！

てつきり耳元を掠めたかと間違っくらいかすの至近距離を、衝撃が脇を通り過ぎた。同時に、今これから通ろうとしていた岩場がドカッと激しく碎ける。

「なんだ！」

“タイヤ”のモーターが唸りをあげて減速回避する。砂埃を上げて二機は止まらざるを得なかった。オウスが反射的に索敵用チップを放出してばら撒く。

「四時の方向！ エネルギー弾！」

「止まるか！ 逃げるか！」

「岩場の影に入って動かないで！ 捕捉出来てない！」

「推定でも発射元は射程外攻撃だぞ！？」アウト・レンジ・アタック

「分かっている。でも二発目までの間がありすぎない？」

「姿を現すのを待つのか？」

キレ気味のオウスの叫びを聞きながら、フレニーはレーダーに映った影を見逃さなかった。直ちに大きさや接近するスピード、先ほどの着弾から推定される攻撃力を算出する。

「私たちよりも大きい機種！ 急にスピードが上がったから、“飛んだ”かもしれない」

「了解だ！」

自然の障害物となって守ってくれるだろう岩場で、彼らは息を潜めた。

外部集音センサーが、機械的な音を増幅させて物体の接近を告げる。

(……………いったい、どういうやつなんだ)

レーダーが完全に捕捉も出来なかった距離での攻撃は驚異だ。そ

れだけウオクトワイスは性能を向上させたマシンを投入していると言っことだ。

(マシンだけか……?)

ふと、自分の身にも起こっているのを思い起こして、パイロットの“性能”についても考える。だが、それ以上深く思考するには時間が無さ過ぎた。

「来た!!!」

互いがほぼ同時に叫ぶ。

岩山の影から黒い機体が浮揚して越えてきたのだ。

太陽を背にして来襲してきたから、陰になっっているせいかと思っただが、機体は全般に黒塗りで明らかにオウスたちの重バイクよりも大きく、そして従来の重バイクよりも優れた飛行能力を備えたのが一瞥して分かる。

「新しいぞ!」

『データは取る!』

生き残るための鼓舞ではない。プロだからだ。

ただ、やはり圧倒される。

手加減無しにいきなりロケットを打ち込んだ。

「どういっことだ! 普通は威嚇の機銃掃射から始めるんじゃないのか!」

軽口を叩きながら、なんとか身をかわす。黒い機体は、無言で大鎌を振り回す死神のようである。

(ひょっとして……シロウトか? それとも、最初から狙っての事か?)

岩石が細かく飛び散る中を縫うように走る。石が車体やキャノピーに降り注ぎ、カンカンと軽い音を立てた。

「建て直しはッ!」

“ローズ・ブラスト”に案を問う。

「覚悟を決めて!」

つまり、戦力分散、どちらかが囮になると言っことだ。

「足りるのか！ 俺たちで！」

「傍受してたら間に合ってくれるはず！」

旅の予定は変更され、瞬時にオウスとフレニーは二手に分かれた。

黒い死神が一瞬迷ったのを見て取り、彼はそのパイロットがシロウトであるのを看破した。

「データは取れそうだな」そして自ら尻を振って誘い出す。「フレニー、射程内で頼むぞ」

15 それは『敵』

「あまりムチャはしないで……」

言おうとは思ったが、心で呟やくことで済ませた。

黒光りの機体の中にキャッツアイのような光の筋が見える目前の敵は、データが少ないだけでなく、倒せそうに無いのが分かる。

それは圧倒的な銃火器と性能の差、パイロットが未熟だと感知した事実を差し引いてもだ。

(何だか、とても凄みを感じる)

敵方パイロットからの交信も無く、無言の気迫ではない。

禍々しさ。そんな力だ。

オウスが先を走り、黒い物体が後を追う。フレニーは更に背後からジリジリと距離を縮めている。当然パイロットは後ろも「見ている」はずだ。

岩陰に隠れるように入りこんでは、ふいにジャンプする。

敵はそれに惑わされながらも、上空に待機してフレニー機を確認していた。

「もう少し、数があれば良さそうだな！」

オウスが試験走行の途中で言う。

双方の別モニターには、仲間の機影が徐々に映りこんでいた。

「相手はそんなに器用ではないから、数での攪乱なら今のうちね」

そう言って、追っている背後から熱線レーザーを打ち込んだが、相手はふわっと軽く身を揺らしてかわした。奇妙にも、それは優雅な動きに見えた。

「何て身軽なっ」

ある意味、感嘆の声を上げる。

それにしても、長距離からの攻撃といい、出会いがしらのロケット弾打ち込みといい、随分なデビューではあったが、なぜか今はオウスの後ろに着いていくだけなのが不可解ではある。

面白そうな機体だ。

それに、パイロットも。

オウスは久しぶりの感触を楽しんでいるはずだと、緊迫する空気の中でフレニーは安堵しながら、タイミングを図った。

(あなたは遊びかもしれないけれど……)

そう念じながら、粒子ビームの出力を上げて照準を絞る。

一撃で叩けるとは思わないが、それでも跳ねるくらいの時間は稼ぎたい。データも手土産にはなる。

オウスとフレニーの間に敵を挟んだまま、随分な距離を走るという奇妙な編成だったが、フレニーが追けていた角度を変えるべく、ついと横へスライドさせた。

機体が斜め後ろの位置につくと、トリガースイッチの指に力をこめる。

「いけっ！」

願望に近いそれを、口から吐き出した。

敵に少しはダメージを与えるべき光の筋は、黒光りする機体をスレスレに避けて、遠く空気中のチリに弾けた。

モニターのデータには、オウスの行く先に急激な地形の落差がある事を示している。

進路について通信を入れようとした瞬間、オウスの声が飛び込んでくる。

『この崖を飛びたいんだが？』

またフレニーに怒られるかと思つてのお断りだったので。

「近接する本隊の補給をアテにしているのなら、多少の賭けね」

『だが、本隊合流には、この崖を降りるのが早いんだ』

「応援要請する」

『ロンワイなんか呼ぶなよっ』

ライバル意識をむき出しに叫ぶと、オウスは一方的に通信を切った。

現在地より直線三キロに崖があり、さらにその崖から十時の方向

に戻るべき本隊が四十キロ先にいる。

「予定より早い。……良いことではあるけれど」

愚直なほど真っ直ぐにオウスの後ろを走る機体を眺めながら、フレニーはアタマの予定表を確認した。

相変わらず敵は何もしない。

最初の力任せな打ち込みはどうしたのかと思うくらい、大人しい。何を考えているのだろう。

ふと、その顔が見たくなかった。

敵だとか、憎いだとかを口にしても、相手にも人の顔が有り、そして表情がある。

どんな顔をして、どんなことを考え、何を云うのか。

それを知りたくなるのは、そこに居て、それと対峙している人間の特権だ。

(まだ……不器用な生き方なのかもしれない)

フレニーは人として、そう思った。

それから、単独すぎる行動も気になる。

どんな指揮系統で動いているのだろう。

そうこうしているうちに、崖っぷちはすぐそこに迫っていた。

「……行くぞっ！」

直接は聴こえないが、間違いなくオウスは気合を入れて叫んでいる。

^{ボディ}上体が前にスライドして、可変翼が横へと広がった。

エンジン・ノズルが火を吹く。

三機は、次々と二次元移動から、三次元の空間へと舞った。

本隊とは数十キロの距離を保ちつつ平行移動するため、僅かに右へ回頭する。

オウスのモニターには、本隊から二機の攻撃機が出たのが映った。

(……持ちそうで……いや、持たせるべきなんだが……)

飛行形態はエネルギーのロスが大きい。

なるべく地上スレスレに高度を落とし、地上効果に頼りつつ着陸

態勢を取ろうとする。

真後ろに敵機が追いついていながら、随分大胆なことだとは思つが、それでもこんな芸当ができるのは、フレニーが居る事に他ならない。耳元に呼び出しが来た。

『ロンワイだ』

「お前かつ」噛み付かんばかりに応じる。

『少し距離をとれ。貴様にも当たる』

実弾にするか、エネルギー弾にするかは言わない。

どちらにしろ、少し威力の大きなものには違いない。

「そう言われてもホバリング能力は、向こうが上でな……フレニー

！ 少し威嚇射撃とかどうだ！」

『準備はしている！ 高度が高くて下が丸見え』

オウスが出力を上げ、フレニーが斜め後ろから銃撃を浴びせ始めた。

ガカカカカカッ！

機体には当たったようだが、大きなダメージには程遠い。

しかし、隙はできる、

ふと、その黒い物体が、自分の身体の何処が怪我をしたのか確認するような素振りがした。

これから二機増えるのは、いくらなんでもわかっているとは思つが、まるで大きな動物の赤ん坊ではないか。

ロンワイと出た、もう一機の機体から大口径の光の筋が発射されたのが確認された。

「オウス！」

実に簡単でよくある手段だが、その掛け声と共に二人は急激にスピードを落とし、あつという間に敵機の遙か後方へ下がる。

急に追尾していたものが居なくなると、一瞬戸惑うのは一般の道路走行でも同じだ。

建て直しの判断が遅ければ、それは次の瞬間に砂漠の砂礫と同等になる。

キラリと地表近くに星のような光が瞬いた。

つんのめったような黒い機体は、下に向けたノズルから激しく噴出させて、より高みへと昇ろうとした。

地上を縫うように目指してきたとはいえ、高度は二十メートル近くは取っている、そのすぐ下をエネルギーの束が掠める。

機体の上昇とエネルギーの通過で、その辺一帯が砂煙で見えなくなつた。

当たらずに反れた粒子ビームは砂煙の中から飛び出して、さらにその先にある岩壁に激突する。

ドゴゴオオオオオン……

青い空の下、ずつしりと低めの大音響と共に岩壁は酷く抉られ、砕けた石を雨あられと降り注がせた。

「ちよつとデカすぎやしねえか！」

眉をしかめてオウスが怒鳴る。

「音がだよ！」

砂埃から姿を現した景觀は、見るも無残な姿を晒している。

この音と震動はウオクトワイス軍にも検知されているだろう。

早めにこの場を撤退しないと、多少、規模の大きい偵察部隊が来る恐れがある。

『どうせ衛星で見られてるんだろうよ。気にするな』

フォローにならない言い草で、ロンワイは余裕をかました。

一方、砂埃の中からは黒い機体も辛うじて被害を免れたように飛び出してくる。

(……いけない)

フレニーは微妙な変化を察知した。

真に迫る身の危険を生肌で感じたと言っのだろう。

「刺激が強すぎたのかも」

『怒ってるんだ?』

「怒ってるというより、なんだか、とても攻撃的な……」

怒る、と言う感情論で表現は出来なかった。

明らかに敵と認識し、そして“攻撃モード”に入ったのだ。

では、今まで我々を何だと思っていたのか?

フレニーは唇を噛み締めたが、それは悔しさからではない。相手の反応が読めないことに苛立ったのだ。

「外見から推察されるスペックと、パイロットの資質だと……相手がベテランなら敵わないが……」

言葉に詰まったフレニーの言を次いで、ロンワイが通信に割り込んできた。

『合流だ。どちらにせよ、俺たちはこの場を撤収しなくてはならん。ここを戦場にしに来たのではないのだからな』

モニター内では、せわしなく黒い機体の分析に勤しんでいた。

黒い機体の所々で、何かがチカチカと光る。

「殺気だった殺意」ではない、明確な「攻撃の意思」を全身から放出して、その機体はゆっくりと大きな凶体を光弾の来た方向へ旋回させた。

どこか、異様な空気を醸し出している。

「……つまりなんだ、オレは無視か？」

五百メートル以上は離れているから、オウスはモニターに映る相手に叫んだ。

ロンワイたち二機は、ほぼ真つ直ぐに向かってきている。

「どうした。新しいのが出たって言うから、せつかく飛んできただぞ」

「こちらのデータも取られてるって事を忘れないで」

これまでに取得した黒い機体のデータは全て転送してある。

この現場に到着するまで、彼らのバイクも少しはシミュレーションが組みあがっている事だろう。

「使える火器は全て臨戦態勢だ。アタック・モードアレは地上に降りそうに無いが、下から刺すか」

コクピットでオウスは、ガチガチと音を立てて装備を確認した。

殆どが起動スタンバイされているから、瞬時に照準合わせと発射を可能にするのである。

動力から振り分けられるエネルギーを計算しながら、モニターに映る敵機を睨みつつ、死角になりそうなところと、弱点になりそうなところを探った。

敵は、どこに格納していたかと思うような位置から、砲身を覗かせている。

その様子はまるで小さな動く要塞のようだった。

味方が近づく砂埃に向けられた砲口。

「ここは……平野だから散開するのも手だけれど……どう動くのか

分からないなんて……」

素人を傍目にはらはらしながら見ているような感覚は、戦場にはどうかとは思うが、そんな気分にもなりたくない敵であった。

「動いたぞっ！」

唐突に黒い物体は前進し始めた。

「ロンワイに真正面から行く気！」

慌てて照準を合わせるが、先ほどまでの愚鈍そうな動きは何処へやら、何の迷いも無く直進する光景は、まるで別の生き物に変わったかのようなものである。

少しは地表へ収まりを見せていた砂埃が、瞬く間に舞い戻った。

『……オイオイ、俺の正面に居るんだが大丈夫か？』

余裕をかましたようにロンワイが言う。

「飛べるか？ コイツは飛行機の方が好きらしい」

『あと五キロで正面衝突だ。左右に割れるから、お前らも回れ』

「こちらはエネルギーがギリギリだぞ」

『一機で一発目なら、最初のお尻ペンペンは大事なんだがな』

ほぼ同時に、それぞれが二手に分かれた。

互いが二つに割れ、その一方で別々にまた組むのである。

敵機はあまり時間を掛けずに狙いを定めたらしい。

左へと旋回し、オウスには目もくれず、ロンワイと組んでいたも

う一機へと向かった。

すぐに三機も後ろから脇から追撃すると、そのまま三方向からマ

シンガンの雨を浴びせた。

しかし、流線型の黒光りする機体は、いとも軽やかに避けてみせる。

『両サイドつけ！ 俺は上から行く！』

いつの間にかロンワイは、高度を取って敵の上に出ようとしていた。

「走りじゃヤツに追いつかねーんだ！」

エネルギー残を気にしながら、オウスも地面を離れた。

追跡しながらも照準は合わせているのに、何故かロックオンがずれる。

直前に何か感知してブレるようにしているのか。

「……？ 何だ！ 届かない？ コイツは百目でも持っているのか？」

ロンワイの口から疑念が漏れる。

目のターゲットを外さず、且つ背後の複数の敵を防御するには、いささか器用すぎるのだ。

ドウツつと黒い機体の砲口から火が吹く。

飛び出したものは実弾だった。

前に行くアタック・バイク目掛けて航跡を描くが、当たらずに地面を砕いて穿っただけに留まった。しかし攻撃目標にされたバイクは衝撃によるめいた。

「ヨルゴスが！」

「まだもっている！」

上から牽制しようと、ようやく追いついたロンワイだったが、急に黒いバイクが上昇をかけてきたので、珍しく驚いて機体を擦った。

「何でこんなに無謀なんだ！」

そして珍しく吼える。

「下から！」

フレニーが隙を逃さず、黒いバイクの“タイヤ”が格納されている周辺に狙いを定めた。

エネルギー弾を放つのと、敵が再度砲撃するのが、重なった。

塵気楼を地平線の遠くに眺めながら、熱くて乾いた空気の中に金属片が飛び散るのが視界に入った。

「……っ……っ」

緊張でカラカラに乾いた喉に、声が引つかかる。

自分が攻撃し、敵機がダメージを受けたのは分かったが、視認で判断できる損傷の度合いよりも、随分と破片の量が多いと思ったのだ。

まさか、とは思っただが。

『フレニー！』

オウスの声で、一瞬の酷いスローモーションを振り払った。

「ヨルゴスが！」

事態を理解する。

敵機が追っていたバイクが爆発して、飛散するところだったのだ。

『チクシヨウ！ 手持ちの機銃では、あの装甲を破れないだと！

ヨルゴスをやりやがって！』

ロンワイが何をしたいか、オウスは察知した。

「待て！ これ以上のエネルギーロスは無駄だ。俺にやらせる！

ガス欠になるのは俺だけで充分だろう！」

『お前を牽引する備品は持ってきてないがな、俺を撃つなよ？』

「貴様でなくてもな！」

一機を撃破して、黒いバイクはその場を離脱しようとする素振りを見せた。

「ヨルゴスのよりは口径が小さいが……」

使用火器を絞ったので、機体システムの余計な部分は、シャットダウンさせた。

照準を絞ると、その部分が拡大された映像が出る。

相変わらず高度は十五から二十メートルの間で飛行しており、“

タイヤ”部分をハウスごと損傷しているのが見て取れた。

これでは地上走行も出来ない。

「……このまま飛んで帰る算段なら……」

二度と地に足が着かないようにしてやるう。

斜め後ろを下から、ギリギリとエネルギーを集約させると、粒子ビームを傷口へお見舞いした。

一発目、敵は機体を斜めにしてかわそうとしたものの、損壊したところに再度被弾した。

二発目、底部の装甲が大きくめくれ上がって一部が吹き飛んだ。

「高度が下がってきた……ロンワイ！ 上からはどうなんだ！」

『こちらもエネルギー弾だな!』
よりよく当たるようにと、ロンワイの機体が黒く艶びかりするバイクの背に近づく。

彼らのバイクよりも一回り大きい。標的はそうあるべくして目前にあるのだと思った。

と、そのバイク上体後部の半球体になっている部分が、ライン状に光が走ったかと思うと無数の光線を放射状に飛ばしてきた。方向も角度も、そして数もランダムなために、光線の幾つかがロンワイとフレニーの機体を掠め、一部を貫いた。

「な!？」

「うわっ!」

さすがに、予期しない反撃で狼狽は隠せなかった。

「これ以上は!」

動揺から来る激しい反動の攻撃心理をセーブしなくてはならない。状況を判断するに、これ以上の戦闘は互いの傷を深めるだけなのだ。

それでフレニーは叫んだのである。

「……分かってるなら……ここは引くべきなのよ」

三機はスピードを徐々に落とし、これから先も敵として自分達の前に立ちほだかるであろう、黒い機体を苦々しく見送った。

砂漠の太陽は相変わらず素知らぬ振りで、夕刻に近い傾きながらも涸れた世界に容赦ない日差しを投げつけていた。

ここの太陽は肌に痛い、と、早くも視界から消えようとしている敵機を眺めながら、フレニーは思った。

それから、自分が搭乗するバイクの方向を変えて、二人に言ったのだ。

「ヨルゴスを」

連れて帰りましょう、と。

「……ああっ！」

声にもならないような喉の絞り方をして、ガシ、と驚掴みにすると、頭に付けていた銀色のヘッドセットを脇に投げつけた。

「……気持ち悪い！」

さらに叫ぶと、シートの上もたれに体を投げ出して、だらしなく座り込んだ。

それから両手で顔を覆い「……こんな気持ち悪いの、いやだ……」と呟く。

肩までの黒い髪をボサボサにして、まるで誰かに遠慮したような物言いは、ストレスの発散があまり上手とはいえない様子である。

「……ドコが壊れたの……」

溜息をつき、イヤイヤながら管理システムで損傷箇所を確認する。搭乘している機体の前輪がタイヤハウスごと、後輪前の機体底部の装甲が剥がれてしまっていた。

「こんなに壊れちゃって」

遮熱偏光グラスの薄暗いコクピット内で、濃いアメジスト色の瞳にモニターが発する光が映りこむ。

「だって、コレ、初めてなのに……」

本人的には精一杯の死力を尽くした今しがたの戦闘だったのだが、その言いようは何ともあっけない。

パイロット・スーツの手袋を脱いで、首もとのファスナーを少し下ろした。

「……こんなに反応が速いとは思わなかったな……システム 1 つで、名前が……何だか」

どうやら機体に搭載されている機能について不満があるらしい。

帰投のルートをチェックしてから、初めて自分を呼び出すライトの点滅に気がついた。

音は、消していた。

「まずい……かもしれない……」

億劫そうに指先で応答開始をした。

「ヴォロス、シャトレイサ！」

何度も呼びかけていたららしい形跡を含んで、簡潔にそのパイロットを呼ぶ。

「……こちらヴォロス、これから帰還します」

他に云う事もない。

「勝手に持ち場を離れるな！ どこまで深追いしてるんだ！ 死にたいか！」

「……はい……すみません……」

「第五世代だと思って、指揮下を離れるとは何事だ！」

「……はい……ルンス中尉」

普通に萎縮して怒鳴られるに任せてはいたが、それとコレは別だ。敵機撃破の報告は上げようとした。「あの……」

「何だ」

「ハーレイのアタック・バイクの部隊が居ました」

「わざわざ探しに行ったのか」

「いえ……気になった方向に……それで……合流しかけたところで、一機潰したのですが……」

なんとも頼りない報告の仕方ではあるが、通信の向こう側から眼を剥いたような形相の雰囲気伝わってきた。

「どの部隊かは確認できたのか？」

「それはできませんでした……」

それ以上は言葉に出来なかった。

「……あとで話を聞こう。真っ直ぐ帰ってくるんだ。それから、ヘッドセットかヘルメットを被れ」

彼女の上官は、彼女についてよほど理解があるのか、その場は収めた。

通信終了後、シャトレイサは自動操縦と全方位自動索敵をセット

し、拳を作つて歯を当てたつきり、押し黙る。
ヘッドセットも、ヘルメットも、足元に転がしたまま手を着けよ
うとしない。

低空飛行の風切音が、機体に振動として伝わってきていた。

先ほどの戦闘シーンが思い出される。

甚だしく不謹慎な話ではあるが、シャトレイサには「戦争をした」と言う認識が出来ていない。ゲームのシューティングそのままの感覚だったのだ。

興味本位に敵を追った。

近づいたり、遠のいたり、少しちよつかいを出してみたり、面白い玩具おもちゃに乗つて、しかし急な展開に驚いて……それで敵方の一機を墜としたのだから、その辺はたいしたものだと褒めればよいのだろうか。

もつと自分は、驚くべきだ、と思った。

それは敵を倒した事についてなのか、それとも人を一人殺したことについてなのか、己にすら定かではない。

当面の問題は、戻ってからルンスにどう怒られるかではあったが。

「少し甘やかしすぎだと思いませんか？」
誰かに先に言われぬような素振り、ルンスが遠慮がちに聞いてきた。

問われた彼女は腰に両手を当てたまま、
「軍としてならば、練習生の時点で既に意義すら間違っていると、個人的には考えます」

と、率直に言った。

「……………そうですか……………そうですね」
自信なさげにルンスは視線を下げる。

ブリッジで、握り締めたままだったインカムの存在を思い出し、元の場所に収めた。

「でもそれが第五世代ファイフスなのでしょう？ 同じ艦にいても別働隊だと思っ
ているし、皆にもそう言い聞かせるから、支障はなるべく回避
できるようにはしてる」

「 気をつけます」

恐らくはシャトレイサの代わり、反省しきりである。

「それより、気になるのはあのコの戦果なだけけれど」

まだ数えるほどしか出撃回数回数の無い素人が、ハーレイ・クラファ
のアタックバイクを一機潰した事に興味があった。

「素直にスゴイ、と言うべきかしらね」

「どうでしょう……………実験段階の域は出てませんから……………あの最新の
機体と、あのシステムがあるお陰とも？」

後ろにまとめている髪髪の束を気にしながら、レジー又はルンスに
ちらりと視線を送った。

「さて……………機械と人間のパワーバランスが悪ければ、大抵は一方の
暴走で自滅すると相場は決まっている」とすると、案外、彼女は
相性良く力を発揮できるんじゃないかしら」

広範囲リーダーの画面に、シャトレイサらしき機影が映りこんだのを見ながら、期待を隠さずに言う。

「但し、あなた達が、研究と戦果のどちらを重視しているかは知りませんが」

他人行儀にチクリとは刺した。

G・B・N・(グレート・ブルー・ネット)のポンプ一基に襲撃、と言う応援要請の一報のためランドキャリア・イバロが向かったのだが、ポンプ基地の被害は微々たるもので、その代わりに保安隊が黒焦げになって全滅していたのである。

その現場にルンス中尉やシャトレイサも出ていた。

数機で赴き、二人ほどが検証のために機上から降りている間に、シャトレイサが忽然と居なくなってしまったのだ。

忽然と、と言っても爆音を立てて、なのだが、慌ててルンスが追うもののピカピカの最新鋭機種には敵わなかった。

ランドキャリア・イバロファイブスに一機しかない大型のアタックバイクと、一人しか居ない第五世代ファイブスが行方不明になってしまったのである。

幸い寛容ファイブス(と云うか、大雑把)なフレッチャー艦長の計らいで、シャトレイサが戻ってくるまでは大ごとにしなないとしたが、彼女を信じるしかないルンスとしては、砂漠の炎天下で僅かな日陰に身を寄せるくらい肩身が狭い思いをする事になった。

ひとまずイバロファイブスに同乗する第五世代の監察医ネルと、協議して対策は立てた。

「……ヘッドセットかどちらかを付けると言ったのに、全く！」

大きい溜息にレジュー又は少しだけ同情した。

「困ったコね。それにしても彼女がそれを装着してないと、データがオンラインにならないのも、どんなものかしら」

「そうなんです……機体とヘッドセットの両方に装備するべきだったんです。が、P・A・C・Sバックスだけに集中してしまった弊害です

「よ
P・A・C・Sバックス？」

「あ、システム 1の正式名称になるらしい名前ですよ。Psychology Adjustment (心理調整) Contactless System (非接触型システム)の略です」
「ふーん、とレジー又は聞いていたが、」

「心理調整ってヘンな造語ね。むしろ彼女にはEmotional Control (情緒管理) システムにすべきなのに」

「思春期を脱して間もない人間は、未だ不安定な精神状態であるには変わりない、そんな意見のようだった。」

「そういうセンスは、ライナル博士に仰ってくださいよ」

「後ろから声がしたので振り返ると、ネルがブリッジに上がってきたところだった。」

「意外とナンセンスな方？」

「さあー。機械と生物の区別くらいはついてると思うんですが、Contactless (非接触型) についても、実は『脳味噌に直接電極を差し込んでないから』って意味らしいですし」

「膝までの白衣の裾を払いながら、シャトレイサ問題についてあまり困ってない顔をする。」

「ルンス中尉のお話では、いま完全に非接触状態のようですね、うん、ああ、仕方ありません。強要すると帰ってこないかもしれませんから」

「ネルはもつと他人行儀だった。」

「他に第五世代フェイスが投入されている部隊はどうなの？」

「横の連絡が取れてないので、なんとも。何しろ四ヶ月しか経っておりませんから、蓄積されたデータ量も少なくて」

「今度こそ本気で呆れたものである。」

「ここは一つ、艦長に一喝していただきたいところね」

「…できれば、艦長の直轄にしていたきたいのですが……」

「シャトレイサは、イバロに居候してるに近い状態である。」

「ややこしい事情により直接シャトレイサに命令できるのは、イバロ内ではルンスだけであり、非常に扱いがたいパイロットであるが、」

しかし今後どうするかという展望すら出てないのが、おそらくは第五世代^{イノセンス}全体の現状である。

しかも、ルンスですら「正式な上官ではない」と言うのだから。

「ウオクトワイズでは、このいい加減な現状をどうお考え？」

「ウオクトワイズと言いますが……我々は政府軍^{ウオクトワイズ}ではありませんから、研究所次第です」

「じゃあ、責任者に方針固めてもらわないと」

「今の責任者は……井上氏だったかな？ たぶん、彼の指示で動いてると思いますよ」

「ハア。なんだか第五世代^{ファイブス}ってカメラのバケモノって感じだわ」

嫌悪感を滲ませて、レジューも溜息を吐く。

ネルは肩をすくめた。

ルンスは無言だった。

お荷物、と言えば確かにお荷物ではあるが、今のところ存在感が薄いためか、精神的負担は軽めに済んでいる。

イバ口で浮いているシャトレイサを毛嫌いしている者はいるものの、当面は大ごとが起きない限りは此処を去ることは無いだろう。

「おまけに、普通に何を考えているか、良く分からない子だし」

フレツチャーが艦長を務めるこの艦に配属されて、四ヶ月は経った。

誰かと仲良くしようと言う気も無いのか、いつも独りであるのは見かける。

だからと言って、ここは学校や何かのサークルではないから、笑みを浮かべて「仲良くしましょうね」なんていう友達の輪を広げる場所ではない。

しかし戦闘がスポーツで言うところの試合なのであれば、個人戦はともかく団体戦もあるし、そこそこのコミュニケーションは必要なのだが、いつもシミュレーターによる訓練では妙に飛びぬけた成

績を出しては独り抜けしてしまつたため、他のパイロットとは話にもならない部分もあつたのである。

作戦会議は出る。

意見も、異見も出した事はない。

(もつ少し、がつつくような食欲さとか、血の気の多さとか)

同僚も、シャトレイサの様子を見て言う。

(敵は倒さなくてはならん。敵、ならばな)

敵を倒す、というのは、自らの存亡を賭けたものであるのに。

(自分で『生きてる』とか『生きたい』とかそんな欲求みたいな、確たる意識が希薄なのだろうか)

辛うじてレジューヌが、彼女に着いて感じ取れた事である。

「立ち位置くらいは、ハッキリして欲しいのよね」

ルンスもそれには頷いた。

結局のところ、そういう結論で収まりそうだった。

「……ごもつともではありませんが……」

ネルは腕を組んで口を開いた。

「もともと、人選からして異常だとも思うのですけれどね。いや、

半分冗談で」

意味深な物言いにレジューヌが眉をひそめた。

「どういう事？」

視線としては、どうにもレジューヌには負ける身長で見上げて、ここは一つオフレコでねと前置きをする。

「実は、彼女ら第五世代はゲームファイブスで選ばれました」

「ゲーム？」

「ゲームって」

二人は同時に聞き返す。

「……ゲームは、ゲームですよ。TVゲーム。遊んだ事はあるでしょう？」

「そりゃ今でも嫌いじゃないけど、それは本当の話？」

「ウソじゃありません。大体、ゲームっていうと幼稚なレベルだと

偏見で判断しがちですが、しかしシミュレータと同じですよ？ 現
に艦内で皆さんやってる」

それでやっと合点がいった。

シャトレイサのシミュレータ訓練の点数が異常に良かった理由に
ついてである。

「……あくまで偏見で物申せば、随分な非常識じゃなくて？」

「それですよ、その偏見を払拭して思い切った手段を用いたのが、
ゲームつまりシミュレータによる試験だったんです。あ、入隊試験
みたいな、ですね」

ネルは少しだけ言い直した。それから、

「幾つかのシミュレーション・ゲームをやってもらって、試験突
破したのが、彼ら第五世代ファイブスと言うワケです」

仮想戦争バーチャルを幾つか行わせた。

特に重要、と言うか手っ取り早く結果を出せたのはシューティン
グであり、兵站や戦略については後々の適性により選抜または教育
すれば良いのだから、初期合格者の多さに着いては想像に難くない。
一番の問題は仮想と現実の世界の接続である。

ゲーム内で敵を確実に倒せても、実際に銃を構えたり、乗り物に
搭乗して狙いを定めれるような適応能力が無くては意味が無い。

簡単な白兵戦やドックファイトなどの模擬戦を行って、生存率の
少ない者は振るい落とされた。

ここでかなりの人数が消える。

その後、幾つかの宿題を与え、戦略のセンスの有無も確認し、体
質と性格のチェックを経て、シャトレイサやソトソト、そしてミレイ
ヤなどの軍隊には似つかわしくない面々が残って、「第五世代ファイブス」に
なった、と言うことらしい。

最大の関門は、P・A・C・Sバックスと言うサイバネ技術運用試験を
兼ねていた、体質チェックではあったが。

「つまり、この勝手な行動と、唐突な戦勝は、そのお陰と言
う事になるのね……違つか、じゃなくてそんな異端を認めなくては

ならない状況にあるんじゃない、私たち」

特異な性質で構成された「ヴォロス・チーム」は、今こうして実戦投入はされている。

「実際、戦争ゲームを第五世代ファイブスと現役とで競わせたなら、第五世代ファイブスのほうが成績良いですから」

「それは重々感じてるところ」

ネルのように研究に携わっている立場の人間でさえ、改めて口にするとなすます奇異に思えてくるし、これからシャトレイサたちが、どういう方向へ成長するのかそら恐ろしくさえ感じるのだった。

「シャトレイサ、間も無く着艦します」

オペレータの声と共に、ブリッジの大型パネルにシャトレイサ機が拡大して映しだされた。

“蟻地獄”の丸い口が大きく開いて、脇からザーツと厄介な砂が流れ込んでくる。

アタックバイクの損傷した底部をハッキリと見せ付けながら、跳ねるようにその開口部から入ってきて、ノズルを下に垂直に向けるとゆっくりと降下してきた。

「……あーあ、新鋭機が……」

頭でも抱えそうにルンスが呟く。

「あれは前輪と、後輪の前のほうね？ あれだけで済んだ、と褒めるべきかしら」

「あとでデータ解析しますから、そしたら敵の正体とレベルが判明するでしょう」

「とんでもない相手が出てこないのを祈るわね。もしかしたらシャトレイサの方が、とんでもない敵であったのかもしれないけれど」

“蟻地獄”は、シャトレイサが入って直ぐに口を閉じようと動きを元に戻し始め、いつまで経っても雲ひとつ浮かばない砂漠の夕焼け空を遮断する。

しばらくは地熱で温かいだろうが、あっという間に凍えそうなほど冷え込むだろう。

温度変化と体調の管理は、砂漠では容易なことではない。

地上よりは寒暖の差は激しくない“蟻地獄”と呼ばれる簡易ドック内でも、自然と暖かい飲み物には手が伸びる。

そんな時間帯なのね、とレジー又はふと気がついた。

鮮やかな腕前、とまでは行かないでも、見た目にはかなり安定した操縦振りで、ランドキャリア・イバロの上部デッキに無事着艦するのが、三人の眼下に見えた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5103d/>

“ダブル・イノセンス” (白の功罪) The ORPAHN II

2009年5月26日01時45分発行